

Free as a Bird 『お気に召  
すまま』

弦月

ありえない。よくありえないって言葉自体がありえない、なんて言う人がいるけれど、本当に意味の分からない状況に面したとき、人間ありえないとしか言いようがないのだと思う。その数日間の出来事は、確かにありえない夢物語で、ありえない状況設定で、だけど確かにありえた現実だった。

玄関を入れてすぐ、エントランスのセキュリティーシステムに最新式のカードキーを通す。それから自分の部屋の番号、生年月日とこのためだけに設定されている八桁のパスワードを入力して、ようやく正面の扉が開くようになっている。つまりはどうやっても住人以外の人間には入り込めないシステムってこと、郵便物や宅配便は全部事務所が預かってきている。

何度繰り返しても戸惑うけれど、一年も経てば人間は大抵のことには慣れる。最近は結構いろいろ慣れてきたほうだと思う。何時に外出して何時に帰宅した、なんていうことまでも記録に残るらしい。まるで巧妙に飼い慣らされるペットみたい、なんて自虐的な感想を浮かべることも一度や二度じゃない。まあ、それでも寝床と餌を与えてもらえるのなら、野良より断然ましなんだけど。

エレベーターに乗ってふと視線を上げれば、そこにも物々しい防犯カメラ。もちろんダミーなんかじゃない。全部本物で、ちゃんと警備室に繋がってて、そこには二十四時間体制で警備員が張り込んでるらしい。まったくご苦労な話だ。

七階建ての七階でエレベーターを降りて、部屋に向かうまでの廊下にも緊急の警報装置が三個も。実際に鳴っているのは、まだ一度も聞いたことないけれど。

そしてやっと部屋の前に辿り着いて、鍵を開ける。ただいま、と聞く者もない・意味のないセリフをため息混じりに呟きながら、戸を開けたその向こうで。だからそれは確かに、ありえない——はずの光景だった。

「あ、お帰りなさい」

部屋の中から突如聞き覚えもない声が返ってくる。おかえりなさい、ではなくなさいと微妙に語尾が伸びているところがポイントだ。まず先に、それで持っていたヴィトンのバックを床に落とす。

目に映るのは、玄関を入れてすぐ、直進した居間のこたつに向かって正座して、こっちを見ている一人の若い男性の姿。

タートルネックのセーターの上にエプロンをつけて、満面の笑顔で（多分ここ重要。すっごく重要）こっちに向かって手を振って、そして反対側の手で——鍋を、鍋をつついてる。

部屋の中に朦朧と立ち上る煙。久しく見てない懐かしい光景。ガスコンロ、その上に乗せられた土鍋、中に詰め込まれた具材と揃えられた食器たちさえ夢と呼ぶにはあまりにリアル。一部の隙もない、今まさにこれから団欒が始められようとする食卓の風景。何もかもが意味不明で、理解できそうにない。

完全に腰が抜けて、玄関に膝を着いて座り込んでしまった。恐怖よりも勝るのは驚愕か、言葉にならない、声にも悲鳴さえ上がらない。震える手で携帯を探す、いやそれよりも外に出て助けを求めべきなんじゃ——

「だ……っ誰か——っ!？」

言いかけたところで、正面からいきなり口を塞がれる。いつの間にか立ち上がって目の前にきていたその人に。同時に彼は開けっ放しだった戸を閉め、鍵も閉める。かちゃりとかすかなその

音に、思わず身体が震え上がった。

「すみません、申し訳ありません。勝手に部屋に上がるなんて、とも思ったんですが」  
場違いなほど長閑な間延びした声。それこそ、言い訳をして許しを請うかの転倒した態度。私は左右に首を振る。自分の意思でもどうにもならない震え。早打ちする心臓の音を聞きながら、自分で自分の身体を抱きすくめる。

「あの、大丈夫です、どうか落ち着いて」

そんなこと言われても落ち着けるはずなどない。怖々と見上げたその人は、……どうしてか奇妙なことに、困り果てているみたいだった。

「あの、と、とりあえず——」

困ってる、やっぱり私の見間違いなどではない。私の様子を窺ってる、その反応を気にしてる。気にした上で、

「鍋でもご一緒しませんか？」

——どうしてその発言に結びつくのだろう。さらに頭は真っ白になる。質問の意味は理解しても、しきれずにゆっくりと首を捻りつつも、頷くことに異論はなかった。

「……おいしそう」

鍋は手の込んだもつ鍋だった。空腹だった身体は素直に反応している。これ全部、この人が作ったんだろうか。実家でもこんな見たことない。二人分には多いくらい。三人分にしても多いかも。……というよりか、そもそも家に土鍋があったっけ——？

心から得意げな表情で、彼は私によそった器を渡してくれた。何度その顔を見ても、明らかに面識のない赤の他人のはずなのだけれど。

「さて、それでは」

自分の分も用意して、いただきますと声をかけたその後に。

「まず自己紹介からいきましょうか」

……はあ。確かに、それは必要ですよ。さすがに私も見知らぬ他人と自宅で鍋を分け合ってるなんて、そんな状況を認めたくはない。素性を知ったところで、他人が初対面の知人にランクアップするだけの話だけ。

「古鳥 閑（ふるとりのどか）、と申します。今日からあなたのマネージャーを務めさせていただきますことになりました」

予期せぬその一言に、手に持った箸が指から滑り落ちて床に転がった。ちょっと待って、今なんて——？ 彼は素早い動作で箸を片付け、代わりにのものを用意してくれる。

「私、そんな話聞いてませんよ」

受け取って、けれどお礼を言う余裕もない。向こうはにこやかに、あっさりと答えてくれる。

「でしようね、急に決まったことですので」

脇に置いていた革鞆からなにやらカードのようなものを取り出すと、それを私に差し出した。呆気にとられながら見てみると、それはこのマンションのカードキー。ちょっとした身分証明書みたいになっていて、顔写真と姓名が載っている。古鳥、閑……え、こんな字書くの？ 変な名前。所属はちゃんと私の担当になっている。

不審なところはなさそうだった。実際、自分のものも出して見比べてみる。寸分違わぬその出来、その具合。ドッキリ、じゃなさそうだし——さっきからいくら捜してもカメラは見つからないし——ということは認めるしかないんだろうか。冗談にしてはいくらなんでも手が込みすぎてるし。

「何なら、社長さんにお確かめになっていただいても構いませんが」

それまで黙っていた彼にそう言われ、二回首を横へと振った。

「いえ、大丈夫です。認めます」

第一、この部屋に入り込めたというだけで、信頼するに足る……と思う。ここには基本的に女の子しか入れない。入れるのはごく一部の、それこそ社長とかマネージャーとか関係者だけ。

「それで？ 柏原さんはどうなさったんですか？」

カードキーを彼に返して、平静を気取って問いかけた。柏原（かしわばら）、というのは私のマネージャー。……うん、彼が辞めたというのなら、元というのが正しいだろう。

「なんでも、急に実家を継ぐことになったとか」

彼は目を逸らすこともなく速答したけれど、私には分かってしまう。

「ずるいですね、大人って」

思わず苦笑して、それ以上の言葉を飲み込んだ。胸に湧き上がるのは、寂しさでもなく怒りでもなければ、ほんの静かな小さなさざなみ。——忘れよう。今、私は今の私の生活だけ守れば、それでいい。

沈黙を埋めるかのように、優しい声が催促する。

「さあ、どんどん召し上がってください」

言われたとおりにやっと食事に手をつけた。誰かの手料理、っていうだけでも久々なのに。思えば今年初めての鍋だった。ふと顔を上げれば、そこにあるのはどこまでも楽しそうな弾んだ表情。出会ってたかだか一時間だけど、こんなに緊張感を感じさせない気さくな人っているものなんだと驚いてしまう。

ほくほくの鍋が疲れた身体に染み渡る。最初は多く見えたけれど、あっという間に片付いてしまった。食べ終わってから、そういえば自宅で誰かと食事を摂るのもまた久しぶりだと気がついた。

「口に合いましたか？」

「それ、全部食べ終わってから聞きます？」

ごちそうさま、の代わりに二人で揃って声を上げて笑った。それから二人で時間を忘れて話をする。話題も豊富で途切れないし、何より話してて楽しい。前任とは大違いだと思った。途中で彼のことを聞いてみたけれど、

「恋人とかっているんですか？」

「あっはは、ご想像にお任せしますよ」

プライベートな質問はやんわりとかわしてくる。ちょっと面白くないけど、まあいいか。そんな感じで夜が更けていく。もっと話していたかったけれど、彼が夜のニュースが終わる頃、時間を見て切り上げた。

……体調管理も仕事のうち、それは充分分かっているけれど悔しい気もする。急に寂しくなって床に視線を落としてしていると。

「ところで、明日早速お仕事が」

帰り支度を整えながら、彼が私に向かって声をかけた。

「え……聞いてませんよ、私？」

今日三度目くらいに、自分の耳を疑った。

「大丈夫です、千沙都さんなら大丈夫」

その自信は、一体どこから来るのだろう。浮かべた笑顔は一切崩さず、伝える声も柔らかい。

「学校は抜けてもらわなければいけません、それでもし不安なら僕がいつでも勉強は見ますんで」

……そんな台詞、今までの人生の中で初めて言ってもらった。乗せられてる、とひしひしと感じながらも。

「詳細はまたあとでメールで送っておきます。大丈夫そうですか？」

頷くことに抵抗はない。よかった、とさらにその顔がほころんだ。食器類を台所に片付け、明日全部やっておきますから、と言い置いて彼が部屋を出て行く。

「それでは、また明日。おやすみなさい、千沙都さん」

何も言わなくても、彼は私が一番呼んで欲しい名前と呼んでくれた。いつもは寂しい部屋の中も、今夜だけは違う風景。

——芹沢 千沙都（せりさわ ちさと）。それが私の、私が私として生きるための固有名詞。

二限目が終わったところで高校を抜けて、最寄の駅で待ち合わせた。改札に着いてから、登録したばかりの番号に電話をかける。

「すみません、遅くなりました——」

五分とかからず、彼は走って現れた。驚くと同時に半ば呆れてしまう。

「そんな、急がなくてもいいのに」

予定の時間より十五分は早かった。私は充分、待つつもりだったのに。

「待たせるわけにはいきませんよ」

息を切らしながらも、その表情は驚ることを知らない。この人となら上手く仕事ができるかもしれない、なんて特に根拠もないけど思った。その笑顔を見ただけで、ぱっと気分が明るくなる。何もかも、やれそうな気がする。

「それで？ 今日はどこになります？」

「中区のスタジオです。ここから十分ほどですから、歩きましょうか」

それだけで仕事の内容を把握するには充分。目を伏せ、きゅっと自分の身体を抱きしめる。

「あの、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

気遣わしげに様子を窺う声。負けじとこっちも明るく笑って、先を歩き出した。

着いたのは撮影専門のスタジオ。前に何度か足を運んだこともある。そう広くはない建物の中を、スタッフや機材を持ったカメラマン、そして同じ年頃の女の子たちが忙しく右往左往している。

「すみません、これに着替えていただいて。三十分後に集合だそうです」

着いて一息つく間もないまま、四畳半程度の狭い控え室に通される。部屋にあるのは等身大の鏡が一枚きり。その前に立って制服を脱ぎ捨て、閑さんの用意してくれた衣装を身につける。上も下もサイズはぴったり。まあ、こんなもの事務所に出してあるプロフィールを見れば一目瞭然なんだけど。

想定したのか偶然かは知らないけれど、私の好きな赤が選んであった。それだけで、気分は違う。覚えてる、赤のビキニは私が初めての仕事でも着た色。似合うかは分からないけど、お気に入りであることは確か。これもお決まりの習慣で、鏡に向かって繰り返し何度も笑いかけてから、部屋を出て行く。

専属なんてものはないから、手の空いているスタッフに髪形だけ整えてもらう。元々肩までそう長くもないから、時間がかかるわけでもない。結局先の人が終わるのを待つ格好になる。同業者はそこかしこにいた。見ずとも自然と目に入るくらいに。同じ事務所の名前を知ってる子から、他の所属の顔だけ見たことのある子まで——後輩ばかり。

知らず、顔が皮肉めいたように笑ってる。気づかれないよう、そっと下唇を噛んだ。胸の前で腕を組み、自分の身体を抱き寄せる。みんな私よりも若いはずなのに、私よりも慣れた感じで撮影に臨んでいく。単純に、年齢と経歴は比例しない——分かっているけど、心の中は穏やかにならない。

どんなに意識しても、視線は他人の研ぎ澄まされたプロポーションに向けられる。……隣の芝生は青い、なんてよくいうけれど。今すぐこの場からいなくなってしまう、なんてそんなことを思っていたら。

「千沙都さん、よく似合いますね」

気づいたら横に彼が立っていた。一部の隙もない微笑み。それと、人に緊張を与えない温和な眼

差し。

お世辞でも何でもなく、心からそう言ってくれてるって分かる。というよりか、この人なら社交辞令でもそう言ってもらえると嬉しいなんて思える。

「ありがとうございます」

身体中がほっと和らいでいくのが自分自身でもよく分かる。さっきまでいろいろ考えていたことが、全部一瞬でどうでもよくなってしまった。改めて隣を見上げると、彼はふらりふらりとあらゆるところに視線を向けている。

「見とれてるんですか？ 一体どの子に？」

そんなことを言う余裕も出てきた。大人をからかうもんじゃないですよ、とたしなめられるかとも思ったけど

「いやあ、お恥ずかしい。ですがこういう場所は初めてなので」

「……そうなんだ」

素直に照れた反応が返ってきた。意外すぎる。すっかり仕事に手馴れているから、てっきりこの仕事長いものだと勝手に思ってしまったけれど。

「あの、前はどこにいたんです？」

もっと、知りたいと思った。自然と興味を惹かれた。だけど答えを聞くよりも先に。

「はい、次準備をお願いします——」

呼ばれてしまった。少し、悲しくなってくる。それでもとん、と彼が肩を叩いて笑いかけてくれる。頑張ってください、とそのさり気ない一言さえ嫌味には聞こえなかった。

高揚した気分そのままに、カメラのレンズに向かって笑いかける。その先に、自分でも知らない何者かを想像する。ただ、必要と思うよりも先に顔はその時々で適切な表情を使い分ける。意識も意思も跳び越えて、身体に刻まれた本能的な反応。

今、この場で必要とされているのは何なのか——考えるまでもなく、行動に移す。

「いいね、ちさとちゃんその感じ」

必要とされているのは私じゃない、でも私。一言、二言指示を受けてリアルタイムで実像にも似た虚像が描き出されていく。

眩しい照明に火照らされて、身体も——神経も熱を帯びてくる。それは一体、誰が何のために必要としているというのか。

数時間にも思えた数十分を経て、私はその間ずっと変わることなくそこに待っていた彼に歩み寄る。お疲れさまです、とその一言に張り詰めていた心が一気に解放されていく。

「昼、まだでしょう？」

問われて、頷く。どんなに気をつけても、やっぱり食事は不規則にならざるを得ない。時間を聞くとなんとか昼と呼べなくもない時間帯ではあったけれど。

「一応、用意してあるんで——えっと、何か食べられないものとかありますか？」

「……だからそれ、なんでいつもあとから聞いてくるんです？」

本当、変わった人。ついつい声を上げて笑ってしまう。

「大丈夫です。あなたの選んだものなら、なんでも食べられそうな気がする」

予想通り、ううん予想以上に嬉しそうな反応を見せる。軽い気持ちで言ったけど、意外と本気かもしれないと後から自分で思った。空いていた休憩室を借りて、低い机に向かい合って座る。彼が荷物から取り出したのはやけに見覚えのある弁当箱がふたつ。……私のだ。家の戸棚に埋まっていた気がする。そのうち片方を薦められて開けると、中身は色とりどりの可愛いおかずたち。それを見て、また心底驚いてしまった。信じられない。わざわざ時間を裂いて作ってくれた、って

こと——そこらで買ってくるのかして間に合わせてくれればよかったのに。

「ええと、何か困ったことありましたか？」

蓋を開けたまま戸惑ってしまった私に向かって、何か気に入らなかったとでも勘違いされたんだろうか、すごく慌てて話しかけられる。それもそれで、見てて楽しかったけど。

「いいえ、大丈夫です。驚いてただけです。お料理、本当に上手なんですね」

恥ずかしそうに、そんなことはありませんよと謙遜してみせる彼。私が手をつけるのを見てから、用意していた自分の分を食べ始める。二つも手作りなんて、いちいちまめな人だ。から揚げ、玉子焼き、ひとつも冷凍食品を使っていないところもこの人の性格をよく表してる気がする。こんな風に手作りの弁当を食べるのも、一体いつ以来なんだろうとしみじみ噛み締めていると。いきなり出し抜けに、あぁっ！！……と絶叫にも近い叫び声があがる。何事か、と驚いて反射的に正面を見つめ返す。

「僕、大変なことに気づいてしまったんですよ」

真剣な顔色で、緊張した声色で、一体何を言い出すのかと思ったら。

「すみません、まだ大事なことを言ってませんでした」

姿勢を正して、深々とこっちに向かって頭を下げる。

「あの、これからどうか、よろしくお願いします」

呆気にとられて、最初は理解も出来なくて、それから人目もはばからず全力で笑ってしまった。笑いすぎて、目に涙さえ浮かんでくる。それがようやく収まってきたところで、こちらこそ、と差し出されたその手を取った。

本当、今更なんだから。人の家に上がりこんで鍋まで作っというて、何を今更。本当、変わった人。でも、悪い人じゃない。

「閑さん、って呼んでいいですか？」

その首が、自然な動作でゆっくりと頷いた。優しい笑顔。ずっと見ていたい。知らず知らずのうちにこっちの顔も和らいでいく。嬉しい、嬉しい。素直に心が躍る。何でこの人は、昨日会ったばかりの私にここまでしてくれるんだろう？

——決まってる。仕事だから、だ。

そこで突然目の前が真っ暗になる錯覚を覚える。胸のどこか奥深くが、軋んで悲しいくらい痛みを訴える。思わずぐっと目を閉じると、瞼の上から手のひらで強く押さえつけた。

「一応、今決まってる仕事だけでも見せてもらえますか？」

だけどそんなのは一瞬間だけ。すぐに通常を取り戻して。なら私も、必要な限りこの人を利用するだけ。自分がもっと、上にいくため。もっと売れるために。誰かが私を利用するように。

そこで使い込まれたスケジュール帳が出てくるかと思いきや、出されたのは何故か新品同然のメモ帳が一冊。机の上に載せて中をめくった。……そこに書かれた字は丁寧で、読みやすいことは確かだけれど。

それ以上深く考えるのはやめて、仕事の内容に目を通す。写真撮影と、それからドラマのエキストラとか、イベントのコンパニオンとか。一応、年内までは決まってる。

「これ、オーディションってどういうことですか？」

その中に、気になる単語を見つけて問いかけた。場所もテレビ局、ってことはグラビアでもなさそう……。

「映画のオーディションがあるそうです。それも準主役ですよ」

自慢げに、という感じでもなかったけれど心なしか得意そうな表情で聞かされて、素直に驚かされる。



「こんな仕事とってくるなんて思いませんでした」

もちろん、そんなの初めてだ。この一年間を振り返っても。それどころかこれまでの人生を振り返っても。

「こういう仕事、やりたかったんじゃないんですか？」

それに対してなんで、と呟きかけて。

「この話、持ってきたの柏原さんなんですよ」

予想もしないところで、予想もしない名前が挙がる。出来れば、聞きたくない言葉だった。

「やめて。あんな人の話、しないでください」

不思議そうに、閑さんが目を丸くした。

「何故です？ ついこの前まで、あなたの担当だった方でしょう？」

「もう過ぎた話です」

凍りつく態度を隠しきれないまま、メモ帳を閉じて突き返す。

聞くところによれば、実家に帰った、とか？ ——そんなこと、誰が信じる？ 信じられる？

「いいなあ、あの人には帰れる場所、あるんだ」

半ば無意識に、皮肉めいた一言が誰に聞かせるでもなく飛び出した。

「知ってるんです、あの人が私を持って余してたのは」

「どうして、そう思うんですか？」

こっちの様子を窺うかのような、少し抑えた声。

「だって会話もなかったもの。いつも私から話しかけるだけで、向こうから何か言ってもらえたことあったかしら」

嬉しくもないのに、すっと唇が吊りあがった。

「この話はここまで、です」

それ以上は本当に耐えられなくて、強制的に話を打ち切った。悪い人じゃないけど、悪い人じゃないから私の真意にも気がつかないのかもしれない。

こんな人にこんな仕事は、向いてないかもしれない。とはいえ前任者が向いてたか、っていえばそれも怪しいところだけど。向こうは私の挙動に驚いてはいたみたいだけど、特にそれにこだわる様子も見せず机の上を片付け始めた。

「今夜も夕食作りますよ。リクエスト、ありますか？」

「決まっていますよ、そんなの」

速答してしまっていた。言えば本当になんでも用意しかねない気がして、ちょっといろいろ試してみたい好奇心にも駆られたけれど。真っ先に思い浮かんだのは、多分料理としては手軽で安上がりな部類に入るだろう献立だった。

「もしかして昔、こういうところで働いてたんですか？」

食卓に並んだのは、要望どおりの——ううん、もしかしたら予想していたものもはるかに超えてしまっていたかもしれない。

肉と野菜がぐつぐつと煮え立つ。おいしそうな豆乳鍋。

出来もさることながら、準備する間見ていたけれど手際も見事なものだった。あまりによすぎて、手伝いますと言うのも横に立つのはばかられたくらい。実際、ほとんど後ろから見てただけだった。

というわけで、今夜も鍋。そう寒い一日だったわけでもないけれど、日が暮れるとやっぱり冷えるから、体も温まってちょうどいい感じ。二人で揃っていただきます、と声を合わせた。

「まあ、そんなところですよ」

彼は笑って頷いた。前職が飲食関係だったのかもしれないし、もっと単純にそういうところでアルバイトしてたのかもしれない。とすればまあ、謎は解けないこともなさそう。だけど、ということはさらに別の疑問が持ち上がる、というところだ。

「どうして、こんな仕事選んだんです？」

ぶしつけない質問だったかと反省するけれど、彼は気にする様子もなくその顔をさらに緩める。

「そうですね——もしかすると千沙都さんに会うため、かなあ」

ほんわかと、柔らかな調子でどこまで本気でどこまで冗談なんだか。……呆れて、耳も頭も疑ってしまう。この人じゃなかったら、眉の一つもひそめていただろう。でも不思議と驚かされただけで、悪い気はさせられなかった。

「冗談、お上手なんですね」

リップサービスも、ここまでストレートにやってくれると逆にすがすがしいものだと思い知らされた。

「でも、それだけじゃ割に合わないんじゃないですか？」

重ねて聞いたのは、純粋な好奇心というよりは反対にからかってみたいという意味だったかもしれない。

まず、徹底的に不規則。そして、徹底的に人間関係に縛られる。給料もけして高いわけでもないし、当たったら大きいけど、男性は特に出世も何も見込めない。結局のところ地道に働いたほうが稼げたりするものだ。

そして、今日の前に映るこの人は、どうしてもそんな風に遊び人だとか、勉強に失敗したとかいう感じには見えないし。

「それなら、あなたも似たようなものではないんですか？」

聞いたのに、聞き返される。普段なら気分を害するところかもしれないけど。

「私の場合は、単純ですよ」

その質問こそが答えなのだろう、と漠然と悟った。私と同じで、彼もまた動機は「働くことそれ自体、だったりするのかもしれない」。

「お金、稼げるからです」

人が働くための、これ以上ない明確な理由。もしも他にあるなら教えて欲しい、ってくらいに。もっとも、マネージャーがそこまで儲かる職業だとは私にはとても思えないが。

「それから、家に居るのが耐えられなくなったから、かな」

よくある話。よくあるケース。ありふれて、ありふれすぎててもう珍しくともなんともない話。……少しだけ悲しくなった。自分から振った話題なのに、胸がどこか苦しい。

そんなこちらの心を読んだわけでもないだろうけど、閑さんは注意を居間のテレビに向けていた

。「最近、物騒ですよねぇ」

「ああ、あの……すぐ近くですよ。怖いなあ」

伝えられているのは、三日ほど前に近所の川原で変死体が上がったというニュース。中年の男性だという話だけれど、身元はまだ分かっていないらしい。

「千沙都さんも気をつけてくださいね」

「大丈夫です。……大丈夫」

何が大丈夫なんだろう、と自分でも言いながら不可解な気がしたけど。そうこうしているうちに、今日も呆気なく鍋は完食されてしまった。

後片付けに閑さんが台所に立つのを、私も率先して手伝った。……わざと、少しでも緩慢な手つきで。だけどそんなささいな反抗もほとんど意味はなく、時間は簡単に過ぎていく。焦りからか、不安からか。

「今度、いつ会えます？」

帰り支度を始めた彼の背に向けて、ほとんど無意識に声をかけていた。

「仕事がなければ来ちゃいけない、なんてことありませんよね」

自分でも信じられないくらいそんな言葉、意外だった。毎日でも会いたい。会ってほしい。会ってどうする、ってわけでもないけど側にいてほしい。家に居てほしい。まるで聞き分けのない子どもみたいだ、と自分が情けなくて嫌になるけど。彼はそれに怒るところか困るところか、ただただ笑ってみせた。

「もしお暇なら、明日ちょっと出かけましょうか」

思ってもみない一言。相手を困らせた、気を遣わせてしまったという罪悪感よりも純粹に嬉しさが勝ってしまう。かくかく、とそれこそ言葉で答えるよりも早く首が動いていた。

「学校まで迎えに行きますよ」

嘘みたい。夢みたい。彼が部屋を出て行くまで、ずっと物も言えぬ子どもみたいに何度も何度も繰り返して頷いていた。

実家は遠くだけれど、一人だと空しいのもあって周辺を出歩くことはほとんどなかった。そういった意味では自然、私のテリトリーは自宅と学校、そして仕事先とに限られていたということになる。

閑さんは本当に迎えに来てくれた。向こうからメールが来て、授業が終わる時間に校門の前で待ち合わせる。どこへ行くのか、と思っているとまず一番近くのバス停まで行って、そこから市内を巡回するバスに乗った。

二十分ほど経つと、周りの景色はあやふやになってくる。さすがに田舎とか山奥に向かってるなんていうことはないけど、心境的にはそれくらい新鮮だった。ましてや、すぐ隣には彼が座ってる。カーブで揺れるたびに肩が触れ合い、否が応にも高鳴る鼓動を静めることは容易ではなかった。

聞き覚えもない停留所で降りて、五分ほど彼の後を追うように歩く。足が止まったのは、一見廃屋かと思まごう古びたビルの前。入り口まで近づいて「上映案内」とか「近日上映」とかいう看板や、壁に張られたポスターを見てようやくここがどこか、それがなにかを理解する。入り口で大人二枚分のチケットを買って、中へと入場する。一本しか上映されてないらしく、どれを観るかの選択肢はない。

この街にこんな場所があったんだ、ってくらいのぼろさ加減。予想に違わず、中も薄暗く足元もおぼつかない。当然という用語弊があるかもしれないけど流行ってないらしく、他に客は一人として見当たらなかった。

.....文句を言ってしまっただけとはいけないけど。言えないけど。正直言うと、ちょっと複雑。確かに彼は、`出かけましょう、`と言ってくれたのであって`遊びに行きましょう、`と言ったわけではない。とはいえ少しは期待しても罰は当たらないだろうに。映画がエンターテインメントじゃないとは言わないが、想像していたのはもっと華やかで明るい場所だったから。

そう広い空間でもなかったけれど、劇場は完全に貸し切り状態。スクリーンは他のシネマコンプレックスに比べたら随分小さく見えただけで、それでも一番前の席に座って見上げると、十分な迫力を兼ね備えていた。

「こういうのはお嫌いですか？」

「.....いいえ、そんなこと」

着いてからずっと表情を見られていたのか、彼が気遣わしげに尋ねてくる。ほら、やっぱりいつもこの人はあとから聞いてくるんだから。心の中で一人、ずるいななんて思ってみる。

ほどなくブザーが鳴り、明かりが一斉に落ちた。幕が上がる。暗闇に浮かび上がる一筋の光と、カタカタとか細い音色を立てるフィルム。予告編もなく、すぐにオープニングが始まる。邦画、ってことは字幕を見逃す心配はないけどタイトルから察するに内容は難そう。寝ちゃったらどうしよう、とそればかりを考えていた私の横で、

「せっかくなら、見ておいて損はないはずですよ」

.....私は別に、映画監督を目指してるわけでもないんだけど。こんな時でも仕事の話ですか。マネージャーの鑑、といえばそれまでだけど少し、悲しい。気づかれないようにそっとため息をついて、座席に一層深く体重を預ける。

でもまあいいか。誰かと映画を見るのも、もう思い出せないくらいいつの話だろうって——そこから次第に、意識は平面の中の時代がかった映像に集約されていく。

映画ならではの強力な、臨場感溢れる音響。抒情的なメロディーと、息苦しさを感ぜさせない会話のテンポと間。そこに目まぐるしい展開だとか鮮やかな彩りは必要ない、徹底して描かれるのは光と影、表と裏、喜劇の中の悲劇。——愚直なまでの、人が人を想うことへの真摯な態度。

エンドロールが流れる頃には知らずに涙が零れ落ちていた。あっという間の二時間弱。最後のほうにはもう映画を観てる、という感覚さえ消えて物語にのめり込んでいた。もっと言えば登場人物に直接感情移入していた。突き詰められた映像美。計算された緻密なストーリーと人物関係。座席に明かりが戻ったその後も、余韻が胸を浸し続ける。そこでやっと隣に彼が座っていたことを思い出して、すぐに手の甲で顔を拭う。それも意味はなかったように思うけれど。感想を尋ねるかのように、そっと微笑みかけてくる。

「すごい……よかった、です」

侮っていただけに、余計泣かされた。エンディングも予想を見事に裏切られた、不意をつかれてノックアウトされたようなものだ。

「最初は古そうな映画、って思ってたんですけど」

「よかった。僕もこれ、気に入ってるんですよ」

そう、屈託なく笑ってみせる。顔は違うのに、その表情はスクリーンの中の俳優にどこことなく似ている気がした。

それからまた停留所まで歩き、バスが来るのを待つ。そこで映画館を出てからずっと考えていた疑問を、私は閑さんにぶつけてみることにした。

「あの、主人公はどうして最後何も言わなかったんでしょう？」

彼がわずかに首を横に傾げる。質問の真意を推し量っていたようだったから、付け加えて声に出す。

「だってそうでしょ？ あの時止めていれば、彼は」

知らず、握り締めた手が皮膚に爪を食い込ませている。

「……ハッピーエンドに、なれたかもしれないのに」

映画のシナリオに対してどうこう言っても、仕様のないことだとは思った。けれど、どうしても胸につかえて、引っかかる。

答えたのは、軽すぎず重すぎず、適度な調子の声色だった。

「そうですねー。けど、僕はあれでよかったんじゃないかと思います」

僕も昔同じこと考えましたが、と言いながら強くも弱くもない、あくまで物柔らかい語り口で意見を聞かせてくれる。

「あれがきっと彼女なりの、彼への優しさだったんですよ。彼もそれを分かってたと思います。分かってたから、笑ってさよならを言ったんじゃないのかな」

……そういうもの、かな。頭では分かってても、心では割り切れない。そういう観点から見れば、また違った感想を得られるだろうか？ 物語を知っても、ううん知ったからこそまた見直してみたいと思えた。

「……難しいですね、」

——言いかけて、口をつぐんだ。ふと目を閉じると、頭の中で何度もラストシーンが繰り返して再生される。その耳に一際高いエンジン音と、低く長いブレーキの音が響いてくる。

「さて、ところで」

バスに乗り込んだところで、彼が声をかけてくる。時間のせいかな人が多くて座れない。発車するのと同時につり革に手を伸ばした。

「今夜はなにか食べたいもの、ありますか？」

「それなら、決まっていますよ」

もうこれ以外考えられない。笑いながら即答する。

帰りにスーパーにでも寄っていきこう、とそこまで話がまとまったところで私の携帯が鳴る。事務

所の社長から、今から来れないかとメールが一件。反対方向じゃない、むしろ途中で通ることになるだろうけど……。

「一緒に行きましょうか？」

「いえ、大丈夫です。どうせ大した用じゃないと思うんで」

呼び出されたことに対して予想はいくらかついていた。むしろ、閑さんについてきてもらってもどうにもならない。そこまでは甘えられない、甘えてはいけない気がした。またあとで、と簡単に別れを済ませると先にバスを降りて歩き出した。

事務所、といってもそう大したものじゃない。貸しビルの一フロアを拠点として使っているだけの話で、そこに誰かが常駐しているわけでもない。主に様々な打ち合わせや会議で使われるけれど、社長も週に半分現われるか、といった程度だ。

廊下の一番奥、社長のプライベートルームとして使われている一室のドアを私はいつもそうしているように二回ノックする。

「社長、お話って何ですか？」

すぐに内側から扉が開いた。社長、といえは世間一般にはどんなイメージが流布されているのかは知らないが——。うちの場合は、スーツから靴、ネクタイや腕時計等の装飾品に至るまでをブランドで固めた、典型的な成金の中年男性。

それもすべて違うブランドというあたりが、節操のなさというか人格を表しているかもしれない。とはいえ、悪いことばかりじゃない。おかげで私もブランドには随分詳しくなったし、機嫌のいいときにはいくらか貰えることもある。

第一、この人に拾われてなければ今の私は、存在してない。それだけは嫌というほど自覚はしてる。だから、だから——。

「見たよ、雑誌のグラビア。なかなかいい感じじゃないか」

あからさまに好色な笑み。もう見慣れたその笑顔。予期せずそれとは対照的な彼のことを何故か思い出して、胸が針で刺されたかのようにしくしくと痛む。

手にしていたのは今日発売の週刊誌だった。私はその中のおまけに収録された何十人のうちの一人に過ぎないけど、それでも自分でもよく撮れているほうだとは思う。

「頑張ってくれよ。こう見えて、君には期待してるんだから」

「……はい、社長」

親しげに肩を叩かれる、触られる。首筋が痺れると同時に、全身が寒々しく冷えていった。

「おかえりなさい、千沙都さん」

「……はい、ただいま」

誰かが家にいてくれることが、こんなにも安心できることだなんて思わなかった。今更ながら自分がよく今まで一人で暮らせていたものだと感心する。

玄関に行儀よく揃えられた靴。案の定、というのだろうか彼は台所に立っていた。会話もそこそこに、鞆を脇に投げ捨てるとガスコンロの前に立つ閑さんの後ろから腕を回して抱きつく。

「……っと、どうかしましたか？」

「いえ、何でもないんです」

驚いて背中越しに振り返ってくるけれど、私の手を振り払ったりはしない。その背中に、顔を近づけて頬を寄せた。

「ごめんなさい、少しだけこのまま」

細く見えて、随分たくましい肩だった。その温もりに甘えているうちに、次第に感覚が蘇ってくるのが分かる。その向こうでは、柔らかい湯気が立ち上って食事の準備が進んでいた。

「何か、お手伝いできることは？」

すぐに手を離すと、変わらぬ表情で問いかけた。

「それじゃあ、食器の準備だけお願いできますか？」

頷いて、備え付けの棚の前に立つ。言葉通り間もなく準備は整った。今夜は水炊き。「鍋がいい

」としか伝えなかったからどんなものが出てくるのかとどきどきしていたけど、予想に違わず食欲をそそられる出来。もう三日目ともなると好き嫌いを伝えてあるから、例のあべこべな問答は繰り返されない。それでも彼は私がそれを気に入るか、散々心を砕いているようだった。

「大丈夫ですか？ 飽きませんか？」

おおらかに見えるけど意外と心配性なんだな、と思う。気の毒にさえ思えたし私自身心苦しかったから、安心してもらえるようにとかく笑って、満足していることを精一杯アピールする。

「大丈夫です。三食全部インスタントラーメン、ってのもやったことありますから」

さすがに健康と体調に留意して最近はとどめているが。彼自身に飽き飽きした様子は見えない。純粹に私が喜んでいるのかを気にかけてくれているらしい。ようやく向こうも納得してくれたようで、やっと自分の分を皿に取り始めた。

「そういえば、僕も誰かと鍋を囲むのは随分久しぶりですねえ」

その視線が、机の上に落とされる。さりげなく独り言にも近い声。

「一人暮らしなんですか？」

おそろおそろ声を挟んだ。何となくだが、家族と同居しているなら絶対に率先して自分から料理を担当するような人に見えたから。

「まあ、みたいなものですよ」

聞きたいことはそれきりではなかったが、あとは言葉にはならなかった。以下、続いた話題はもっぱら今日見た映画について。何気ない会話から、次第に熱っぽい議論へと移行していく。

この人の解釈だとか意見はとても興味深いし、参考になる。私も少なからず映画は観ているほうだと思うけれど、彼の知識と見解には遠く及びそうにはなかった。まだまだ、と反省させられてしまう。彼は自説は語っても、けして私の意見を否定はしない。そういうところも話してて気分がいい要因だろう。様々な意見が飛び交う中、うぬぼれに違いないけど私とのやりとりに楽しんで応じてくれているように感じた。

「映画、好きだと思いましたよ。家にも結構DVDがありますしね」

見られていたのか、とちょっと驚かされる。彼の視線の先、プレイヤーの横に積まれたディスクは趣味で揃えたもの、付き合いで貰ったもの、といろいろだけど三分の一ほどは借りているだけで、私のものではないと思っていた。

「あの人も映画が好きで、たまに持ってきてくれたから」

.....言ってからしまった、と思う。聞き逃してくれることを期待したけれど、残念ながらそうもいかなかった。

——あの人。その代名詞の指す相手を、彼は一瞬で読みきってしまったらしい。

「前に柏原さんと会ったのはいつになりますか？」

その上で何故か、どうしてそんなことを、と思える質問をしてくる。

「それ、答えないとダメですか？」

「はい、お願いします」

詰問される、という雰囲気でもなかったけどその笑顔の前ではごまかすことも嘘をつくことも容易くない。まあ、それで満足してくれるならいくらでも答えるけど。あの人と最後に会ったのは閑さんと会う三日前、だから.....。

「先週の日曜日、ですね」

仕事先から家まで車で送ってもらったのが最後。思えば、あの時も変わった様子は一切なかった。あの人の仕事辞めるなんて思いも寄らなかったけど、世の中は意外とそんなものなのかもしれない。



幸いにも、それ以上話題は続かなかった。ニュースでは先日の事件の続報を伝えている。例の事件……というよりは事故か。亡くなったのはフリーの雑誌記者だという話だった。それが天気予報になって、終わりの時間が近づいて。それをずっと、どことなくやるせない気分で追っていく。

「閑さん、あの」

先に沈黙に耐え切れなくなったのは私の方。それだけで、簡単に言いたいことを先読みされてしまう。

「申し訳ありません、土日はちょっと」

しょげた調子で、閑さんはこっちの方が恐縮してしまいそうなほどぺこぺこ何度も頭を下げる。自分で自分に、激しく呆れて悲しくなった。そんなの、忙しいに決まってるだろう。この人にだって、プライベートはあるんだからそうそう私に構ってられるはず、ない。

「いいんです。気にしないでください」

懸命に首を左右に振って笑う。一人での時間の潰し方は、いくらでも知ってる。元々、一人でいることのほうが当たり前だったんだから。

予定では、仕事は来週だったっけ。一週間空いてしまう——それを思うと複雑だったけど、できるだけ今は考えないようにした。表に出すと、この人はきっと悲しそうな顔をする。

それでも、強がりに笑えば笑うほどそれに比例して痛みは増していくかのよう。名残を惜しむように、その夜はマンションの入り口まで降りて彼を見送った。

「ちいちゃん」

誰かが名前を呼ぶ。聞き覚えのあるようなないような、小さな子どもの声。何度も何度も繰り返して、紡ぎ出される懐かしい響き——それに私は、飽かずにじっと耳を傾けている。古びたテープレコーダーにも似たノイズと唸りの中で。

「ちいちゃんはほんとうに、てれびがだいすきだね」

景色は自分の家じゃない、誰か他の人の家の中。まだ幼い、少年と少女。顔はよく分からない、でも声だけは掠れながらもはっきりと聞こえていた。

「うん、わたしおおきくなったらてれびにでる！ おかねをいっぱいかせいで、そしたら——」

それは、誰？ それから、一体——何？

ぱっと、そこで目を覚ます。視界には、木目の模様までくっきりと見覚えのある天井。自分の家、自分の部屋のベッドの上。

起き上がって、しばらく判然としない頭で呆然と辺りを見回す。特にそこに何があるというわけでもない、普段どおりの、何の変哲もない自分の部屋。目覚まし時計を手に取り、時刻を確認する。朝方、休みに起き出す時間にしては早い気もしたけど寝直す気分にもなれなくてそのまま床に足を下ろした。

ふと鏡を覗き込むと、目が虚けたように潤んでる。いまだ醒め切らない夢の中、うっすらと残る断片的なまぼろし。私はそんな、声も会話も知らない。……なのに何故、こんなにも懐かしいだなんて——感じてしまっているんだろう？

見つめ返したその先に答えがあるわけもなく、惚けた自分の視線が返ってくるだけ。目を閉じて顔を背けると、冷め切った居間に足を伸ばした。——冷たい。足の裏に触れる床も、肌に触れる空気も、何もかも。静まり返った空間に、つけたテレビの音声だけがやけに騒がしく響く。それを見ながら簡単に朝食を済ませて、この後のことを考えた。

休みの日は家事をやったり、ぶらりと買い物に出るのが大抵だった。昨日もそうやって一日が何気なく過ぎていったし、今日も多分それに従うことになると思う。昨日から携帯には指一本触れていない。触る必要がなかったからだ。絡まった髪を、指でそっと解きほぐす。

こういう日に限って、天気だけは良さそうなのが苛立たしい。

午前中は家で過ごして、午後になってから出かけることにした。近くまでの外出のつもりが、結果的に珍しく遠出をしてしまった。たまにはこういう休日も悪くないと思うほどに。まだ空は明るいけれど、陽はもう暮れ始めている。じきに暗くなるだろう。

帰宅して、一人きりの夕食をどうしようか、と悩みながら鍵を開ける。と、意外なことに気がついた。玄関に一足、明らかに自分のものじゃないスニーカーが並んでる。手前にきちんと寄せられて、見たところ心当たりは一つしかない。

慌てて靴を脱ぎ捨てて部屋に駆け込むけれど、どこにも姿は見えなかった。居間にも、台所にも。ぐるりと一周したところで、洗面所から物音が鳴っていることに気がつく。まさか、と半信半疑でノブに手をかける——鍵はかかってない、というよりも構造上かけられるようにはなっていない。

ドアを、開けた、ところで。

「——ち、ち千沙都さん！！？」

ひっくり返ってくる声。本来のものよりも引きつれて、とんでもなく裏返っている。けど、声よ

りも先に私の意識は違うところに。向けられて——そして、止まっていた。

「は……っ、あ、あのっ、すみませんっ」

出来るだけ素早くドアを閉め直し、同時に背を向ける。予想外の事態に頭はパニックになって、力が抜けて思わずその場にへたり込んだ。

「も、申し訳ありません、まだ帰ってくるまで時間はあるかと」

「い、いえ……私こそ、確認もしないで」

扉越しに伝わる彼の声は、やはりまだ慌てている。私の方もいい勝負で、俯いてぼそぼそと返すのが精一杯だった。

胸に手を重ねると、並大抵でないほどに音を響かせていた。何も見てない、見えなかった——けど。

内側から時折聞こえる布地の擦れ合う音に、怯えたように身体が震える。思わず耳に手を触れると、予想以上に熱を持っている。何、私ったら変なこと——考えて。顔が熱い、今にも心臓が沸騰しそうだった。

……意外と、着やせするタイプなんだと思う。普段の表情と物腰に騙されそうになるけれど、ああ見えて運動でもやっているのか、それとも昔やっていたのか。体つきは十分に鍛え上げられた男性のそれだった。

追い払うように目を瞑っても逆効果で、鮮明に焼きついていくような錯覚さえ感じて戸惑う。そこで不意に中から扉が開けられる気配がした。弾かれたように立ち上がり、その場を退く。申し訳なさに、と同時に照れて恥ずかしそうに彼が弁解する。

「すみません、今宿泊……じゃなくて、住んでる場所にはシャワーがなくて」

洗いたての濡れた髪、それさえ私の目には大人びて映る。

「銭湯に行くしかないのでどうせならついでに、と思って」

……そんな貧乏暮らしにはとても見えなかったけど。

私としても勝手に家に上がられて腹立たしい、と思うより早く自分が考えなしだったことへの引け目が先にたつ。ただいま、と声をかけなかったのも私の手落ちといえるかもしれない。そもそも初対面から、あんなの、だったし。

「い、いいんです、もう大丈夫です」

引き続き謝り倒す彼に向かって言うけれど、シャツの上に淡いブルーの上着を羽織り、ボタンを留めていくその仕草さえ視線を誘惑した。長い指。はだけた襟元。尋常じゃない自分に気がついて、慌てて目を逸らす。考えないようにしよう、と思えば思うほど頭は反対に言うことを聞かない。

黙ってそれきり何も言えなくなってしまった私に向かって。

「……あ。それ、借りてきたんですか？」

閑さんが私が手にしていたビニールの袋を指差して、にわかに微笑んだ。透けたその内側のタイトルは、一昨日彼との会話の中で上がったもののうちのひとつ。

「あ……はい、面白いって教えてもらったから」

「じゃせっかくだから一緒に観ませんか？ 僕も久々に見たいな」

途端にその表情が、無邪気な子どもっぽいものになる。二つ返事で快諾したのは、語るまでもないこと。

「今日は肉が安かったんで。さあさあ、どうぞ遠慮なく」

そういう彼が夕食に作ってくれたのは、鍋の定番すき焼きだった。そうは言うものの買ってきてあったのは上質そうな国産牛肉。一人暮らしじゃどうあっても食べられるものじゃない。味付けは好みが分かれるところだろうけれど、そこはもう既に真剣に議論済み。伝えたとおりの甘口だった。彼自身は個人的には辛口が好みらしく、七味でさらに味をつけている。大好物というものもあるけど、話も弾んで箸が止まらない。

この人が来てから、いつも思う。それまでの自分がいかにつまらない時間を過ごしてきたか、ということ。退屈で気詰まりで時には苦痛でさえあった食卓が、一気に賑やかになった。楽しくて、待ちきれないほどに。

夕飯を終えたら、そのまま流れで映画鑑賞の時間になる。二十型のモノラルテレビは設備としては物足りないかもしれないけど、真に問うべきは内容だ。それさえ充実していれば、あとの問題は瑣末なこと。

閑さんが勧めてくれたのは肩肘張らずに観れるコメディ。けれどその中でも社会風刺とか皮肉が織り交ぜられていて、時に泣けるシーンもある。愛嬌のある登場人物といい、一気に気に入ってしまった。見ている間、往々のシーンで彼は予期せず幼い顔をしてみせる。年齢を感じさせないくらいに。そのギャップがまた、私をどぎまぎさせながらも心を惹かれた。

何より、誰かと同じ時間を過ごしているという事実がたまらなく心地いい。声を上げて笑うことが、こんなに気分がいいことだったなんて——誰かと笑い合うことが、こんなに自然なことだったなんて。初めて知ったかのようにいちいち驚いて、だけどそのたびに胸を躍らせている自分がいる。

それを理解し直したときにまた顔は知らず知らずひとりでに笑みを浮かべている。あたたかい、と身に染みて強く感じた。

それでも、そんな時間はやはり長くは続かない。十一時を回った辺りからだんだんと気が滅入ってくる。今日は休日、だから明日は平日。明日が学校なんて、考えたくない。明日も休みならいいのに。そんなことをぐるぐると考えながら、こたつに入れた足をぎゅっと抱き寄せて。

子どもっぽく無理やり話題を繋ぎとめて、十二時、一時、一時半——までは覚えてる。時計を気にしてたのは、私よりもむしろ彼の方だっただろうけど。レンタルしたDVDも全部見終えて、早くも二周目のエンドロール。

人間ってのは勝手なもので、それでも我がままに付き合ってくれる彼に素直に嬉しいと思う一方で、いっそ叱ってくれたらなんて思ってもしまう。ほら、やっぱりどんなに逆らっても、今日も帰っちゃうんでしょ——

それははたして、言葉に成ったか、成らなかったか。

そして目が覚めたとき、そこは見慣れた自分の部屋。薄暗く、カーテン越しに朝日も差さない。まだ時間が早いようだった。中途半端な時間に覚醒したものだと思われて、毛布を身体から剥ぎ取ったところで気がつく。セーターにフレアスカート、着ているのがいつもの寝巻きじゃなくて、昨日の服のままだということに。普段じゃありえないことだった。

それが、どういうことか——分かるよりも先に、起きて部屋を飛び出した。明かりが落とされた居間には、こたつの横で寝転がっている人影が一つ。私がそっと足音をひそめて近づくと、声もかけていないのにぱっと目を覚ました。おはようございます、と静かにひそやかな挨拶とともに起き上がる。聞くべきか聞かざるべきか、私が唇を彷徨わせて迷っている中で

「あの——その、帰るに、帰れなくて」

顔色は暗くははっきり見えないけど、声から類推するに、どうにも困ってる感じ。言い訳する必要があるとしたらそれは、絶対に彼ではなく私の方なのに。

「……ごめんなさい、本当」

恥ずかしいとか申し訳ないとか、有難いとか情けないとか——。思うことは様々あるけれど、これだけははっきり言える。本当、死にたい。

それ以上の言葉もなく、無言のまま私は電灯のスイッチを入れた。部屋が明るさを取り戻し、そこでようやく時間を知る。もう一度寝直すという時刻でもなかったし、気分でもなかった。

彼もそう判断したのか、腕を伸ばして一度大きく伸びをすると、私に向かって声をかけてくる。

「何か、飲みますか？」

黙って、こっくりと頷いた。彼が立ち上がって台所に向かう。やがてやかんのお湯が沸騰する音がして、すぐに二人分のマグカップが運ばれてきた。

お礼を言って、受け取る。中身は温かいミルクティーで、ふうと息をかけて冷ましながら両手で包み込むように持つと甘い香りが鼻先をくすぐった。

湯気が優しく部屋の中に融けて消える。ゆっくりと、味わうように飲み干すたびに身体が心から温まっていく。静かで、だけどそれがかえって心地良いくらいの時間。言葉も要らない。ただ本当に、ここにこうして座っているだけでよかった。

例えば今この一時を、言葉にするとすごく陳腐で安っぽいものになってしまうだろう。それは嫌だから、せめて手に持った紅茶が冷めるまでの間、じっといとおしむことにした。

「差し支えなければ、聞かせてください」

飲み終えたカップを机の上に置いて、閑さんが尋ねてくる。伏せていた視線を私に向け、今まで以上に気を遣った、慎重に慎重を重ねた態度で。腫れ物に触るような——ということ、少し大げさすぎるだろうか。

「どうしてあなたはこんな仕事を？」

それなのに、こんな仕事、なんて。それは確かにいつか私が彼に向かって言ったのと、同じ言い回しではあるけれど。

「お金が稼げますから。それも手っ取り早くね」

デジャブさえ感じるほど近似したやりとり。自然と口角が上を向く。もちろん答えは決まっているけれど、こうして口にするのと酷く物悲しかった。そんないつかの焼き直しにも近い私の返答に、彼は何も言わない。代わりに両目をすっと細めた。

「それと——あの、すみません。これも気分を害するような質問でしたら、申し訳ないんですが」

声も心なしか段階を経て小さくなっていくよう。おかしいものだ、そこまで躊躇うのなら聞かなくてもいいのに、と思わずほろ苦い笑みを浮かべるけれど。彼にはそこまでして私に何かを問い

質したい必然性でもあるのだろうか。

「ご家族は、一体？」

言いよどんだ割には、簡潔な一言。もっととんでもないことを聞いてくるのかと身構えていたから、一瞬拍子抜けしてしまう。とはいえどこかで知られたら、と不安に思わなかったわけでもない。返答を渋ることも、拒絶することだってきっとできなくはない。少し、迷って、考えて。それでも、誰かから知らされるくらいなら自分から伝えたいと思った。

この人になら。話して、聞いて欲しいと心から思う。紅茶を飲み干し、考えた末の返答は。

「いるけど、いないも同然ですよ」

そんな言葉遊びみたいなものになってしまった。血縁関係だけが唯一の条件だとしたら、私にそれはいないこともない。だけど、「一緒に住む」とか「生活を共にする」とか。そんな特別の意味合いを含むと、存在は否定され、事実は否認される。ゆえに結論はこうだ、——私にはずっと、昔からそんなものはいない。

必要とされてこなかったから。それもおそらくは互いが互いに。そこで口を閉ざすと、一気に重い沈黙が押し寄せる。机の上に両腕を組んで、その上に頭を置いた。空いた指先でカップの取っ手をついとなぞる。

沈黙が、痛い。何か言って欲しかった。けれどそうしてくれないのは、彼も決めたからだろう、私の話を聞く、って。

すぐ近く、そこには手を伸ばせば届く距離にじっと座って、ただ黙って私の言葉を待っていてくれる。……変なの。なんであなたのほうが、泣きそうな顔してるの？ それともそれは、私の目の錯覚に過ぎない？ 促すわけでもなければ、止めるわけでもない。その眼差しが言っている。権利は全部私に委ねる、って。そんな、いかにも酷い冗談。

例えば話してくれと詰め寄られたほうが。そうしないならいっそ何もかも触れずにいてくれたほうが。ずっと、どれほどましたか分かってる？

じきに腕は痺れあがって、頭もパンク寸前だった。

「私のこと、君は売れるって言って喜んでくれたっけ——」

そして私は彼に、自分が今ここにこうしているまでの経緯を語り始める。順序はばらばらで、分かりやすい言葉だって選べない。だってこんなの、誰かに語るためにとっておいた言葉じゃない。むしろ、誰にも知られずにいることを望んで、実際そのとおりにここまで必死にしまい込んでいた思い。願い、そして感情。——私は家を捨てた。

私が捨てたのか向こうが必要としなかったのか、そんなことはどうでもいい。それとも親から逃げる必要があっただけなのか。とはいえ高校に入ったばかりの小娘が一人でできることなんて、たかがしれている。できることがあると思うことのほうが難しいだろう。だけどそこまでしても、そうするしかなかった。他に方法はなかった。社長の言葉のどこまでが本気だったのかは、今となっては知りたくはない。

出会いは本当に偶然で、手持ちのお金と万策が尽きて彷徨っていた私が、半ば自暴自棄に声をかけたのがきっかけ。その夜目に留まった、いかにもお金を持ってそうな男性、がたまたまあの人が、というだけのこと。

その結果運がいいのか悪いのか、仕事とお金と家まで与えられている。働いた分は生活費に消えていくけれど、それ以上「おこづかい」が欲しければ方法もなくはない。……ううん、きっと文句を言うほうがおかしいだろう。今私がこうしてられるのは、曲がりなりにも生きていられるのは。

「憎いと思いますか？」

誰を？ 一体何を？ 思いも寄らない一言に、驚いて顔を上げる。彼の口からそんな言葉が出てくるなんて、何の間違いかと思った。

けれど、その表情が聞き間違いじゃなかったんだということを教えてくれる。真剣で、かつどこか曇りがちなその顔色。

「知っていますか？ 事務所のこと」

何を、と聞くまでもなく頷く。言葉は出てこない。……だって、他に方法はないから。

「知っていてなお、従うんですか」

最後は疑問形じゃない。語尾は下がって、ある種の諦観を感じさせる。私はテーブルにうつ伏せて顔を伏せる。閉じた瞼の裏が久しく感じていない熱を帯びていた。その肩に、彼の手が触れる。

「違いますよ——違うんです」

顔を上げて、私はろくに言葉も知らない子どものように首を横に振って言った。

「私一番、親が憎いです。憎くて憎くて、できればこの手で殺したいくらい」

そんな穏やかじゃない言葉も自然なくらい、心情を表すにはこれ以上の確なものは見つからなかった。身体の内側からひしひしと湧き起こる、切ないまでの衝動に唇をぐっと噛んで堪える。——だからなんで、そうあなたのほうがつらそうな表情をしているの。それとも今の私は、それよりももっとひどい顔をしてるんだろうか。顔が、引きつるように笑みを浮かべた。

「『あんたなんか、産まなきゃよかった』——なんて。ひどいでしょう？ 本当に言う親、いるんだなあって」

それに対して彼はしばらく目を瞬かせていたけれど、突如それを止めて今までとは正反対の感情を面に示す。

「言われたことありますよ、僕も」

あっさりと、返答は軽く重さを知らない。冗談のような気軽さだった。

「なんて言ったら、信じますか？」

映画の感想を述べてるときと同じ、どこるかそれ以上にそれはまさしく他人事の響き。

「正確には産まなきゃよかった、じゃなくて産まれてこなければよかったのに、だったかな」  
なんで？ どうして？ 声が震えていた。純粹な驚きで、思わず叫び返してしまう。

「信じられない。そんなこと言われて、なんでそんな風に笑えるの？」

——そんな風に。何も感じさせない、寂しさも孤独も、痛みさえ窺わせない、完璧なまでの笑顔で。

「さあ、なんででしょう。逆にそんなこと言われたから、ですかね」

取り乱した私を見ても、顔色一つ変えずに答えてくる。

「だって意地でも生きてやろうって思うでしょ？」

その様子に、日常との違いは何一つ見つけられない。少なくとも私には探し出せない。啞然とさせられて、言い返すことも出来なかった。

「……信じられない。真面目な人かと思ったけど、結構どうにかしてるのね」

我ながら随分な台詞だという気がしたが、それ以外に感想は浮かんでこない。何より、それまでのやりとりで言葉を取り繕うという神経が疲れきっていたから。

「おかしいですね。それ、よく言われます」

それでも彼は、私にそう言われることすら愉快的ようだった。一人呑気に声をあげて笑っている。まったく、呆れてしまう。呆れて、あきれ返って。お陰で今まで何の話をしてきたのか、それさえ忘れてしまいそう。

そして目の前にあるのは、ずるいくらいに満面の笑顔。私ももう、笑うしかない。ため息混じりの苦笑いだけだ。

本当、ずるい人。聞くだけ聞いて、思い出させるだけ思い出させて、考えたくないことを考えさせて。それで一体、あとは私にどうしろと？ たとえ奥にあるのが優しさだとしても、残酷だとは言えない。初めてこの人が嫌いになりたいと思った。

幸い、悲嘆にくれる暇もなく朝が来る。軽い微睡みに襲われているうちに、普段どおりのいつもと変わらない自分が戻ってくる。それからシャワーを浴びて制服に着替えて朝食、と言葉少なに支度を済ませると、家を出て行く彼を見送って自分も学校に向かう。

綺麗に澄み切った空が、憎らしいほどに鮮やかだった。



「台詞の練習、ですか」

彼が一冊の本を手に、マンションを訪れたのはそのまた翌日のこと。例のオーディションが近づいているらしい。最終選考は実際に台本を読んだのリハーサルとのことだった。書類選考は通って、私の知らないところで話はそこまで進んでいるらしい。彼はそれを柏原さんが懸命に推してくれたお陰だ、なんて言っていたけれど。だけどそんな、プレッシャーにしかならないようなことを言われても困る。

「そんなの、私には無理ですよ。演技の経験だってほとんどないし」

途端に弱気になる私に、

「こういうのは、やる気の問題だと思いますけど？」

彼は、その一点張り。先日の会話で、重々知らされた気はするけど……この人見かけに相反して、かなり押しは強い。できませんなんて言うことはできなかった。まあやれるだけのことは、と思うけれど。仕事は仕事だし、それを選び好みできるような立場にはないことくらい分かってる。

私がわかりました、と折れたところで彼が多分、心の底から本気で喜んだ、ように見えた。

そして持ってきた鞆の口を開けると、そこからわっさわっさど何やら大量に飲料缶を取り出し、冷蔵庫にしまっていく。ラベルは総じて全部同じ——私の目に狂いがなければ缶ビール。発泡酒の可能性も考えられたけど、まあ、細かいことはこの際いいか。問題なのは……まさか忘れているわけではないと思うけれど、あくまで人の家の冷蔵庫なんだけどなあ。と半ば気圧され気味に私がそれを眺めていると。

「なんか、いろいろあって成り行きで貰ってきてしまったのですが」

そこでようやく彼が、一旦手を止めてこちらを振り返る。ぱたんと扉が閉められる音。

「全部僕が飲むんで、すみませんがとりあえず置いておいて貰えませんか？」

真顔でそんなことを言ってくれる。……って、結構な量あった気がするんですけど？ 結局入りきらなくて、残りは野菜室に放り込まれていった。

「まさか、家に冷蔵庫もない、なんて言いませんよね？」

おずおずと聞いた私に、彼はにこっとただ笑うだけ。……うん、細かいことを考えるのはやめにしよう。仮にもしそうだとしたら、うちの冷蔵庫が占領されたところで私の身に何か重大な危機が及ぶわけでもあるまいし。うん、大目に見よう、大目に。

気を取り直して。そして私と彼は、居間のこたつに向かい合って座った。二冊の台本をその上に並べて突き合わせる。オーディション、ってことはこれに受かったら——まあ万が一にもそんなことはないだろうけど——ぱらぱらとページをめくって考えていると。

「言っておきますがやる以上は絶対、合格しましょうね」

……本当、この人実は読心術でも使えるんじゃないのだろうか、ってくらいなんとも的確なタイミングだった。

まずはト書きにかかれたあらすじを黙読。物語の中心人物は三人の年子の姉妹と、長女に言い寄る男性が一人。主なストーリーはいわゆるラブコメ、喜劇のスタイルをとっている。なんでも、古典をベースに現代風に解釈してアレンジしたものらしい。私の受ける役は、その中の次女。閑さんの話では準主役、と言っていたっけ。

「千沙都さん。僕はむしろ、必要なのは演技力よりも想像力なんじゃないか、って思うんですよ」

ページを開いて折り目をつけながら、閑さんがそんなことを言った。私には何のことだか分からない。

「それでは、始めましょうか」

それから下読みを兼ねて彼と二人で台詞を読み合う。次女以外、つまり私のパート以外の役を彼は実に器用に読み分けていった。かと思えば、

「あ、そこ漢字の読みが違いますね」「若干、訛りが入ってしまっているかと。標準語だと——」

そうやって監督よろしく、指導までしてくれてしまう。脚本自体は確かに面白くて、すいすい読めて頭に入った。最後まで目を通すと、今度はそれが映像化された瞬間を想像する。今までの仕事とは違って、一筋縄ではいきそうにない。

本に載せられているのはシーンをいくつか切り取り、ピックアップしたもの。これが前後どんなつながりを経て、最終的にどんな物語になるのか。確かに興味は惹かれた。

暖房がかすかに低く響く以外ほとんど無音の空間で、様々な感情の語調が乱れ飛ぶ。長女は、情熱的かつ奔放的な性格。恋愛に関してもかなり積極的な感じ。三女は対照的に無垢で純情、健気な印象を受ける。

そして問題の次女は。あとの二人に比べると、性格は分かりづらいように思う。どんな喋り方をするのか、どんな顔で自分の感情を伝えるのか。すべてを想像する。……創造、する。

あれも違う、これも違う、といった調子で何度も繰り返して試行錯誤する。まるで手探りで暗闇を突き進んでいるような頼りなさだった。ぶっ通しで二時間も続けていると、さすがに喉も渴いて、疲れてくる。

そこで夕食にしましょう、と彼が一旦中断を申し出てくれた。私が何も言わない側から、エプロンを取り出してきて準備を始める。今夜も作ってくれるらしい。今日は雑炊のようだった。出来上がっていくのをはたで見ながら、私は前々からずっと思っていたことを聞いてみることにする。

「閑さん、私に構ってばかりで大丈夫なんですか？」

私生活もちろんだけど、仕事の方だって。他の人の担当や雑務だってあるんじゃないんだろうか。ましてや、こんな私みたいなものためにこんなにも時間を割いて。

「僕が本気だってこと、君に信じてほしい。」

振り返って、出し抜けの一言に一瞬ドキッとさせられるけど。やがてそれが台本の中の台詞だと気がついて、若干へこむ。

それ以上、余計なことは考えないようにした。味は当然おいしいし身体も温まるけれど、なんとも言えない緊張感だけは拭いきれそうにない。食べた後ももちろん練習は続けられる。私としても、もう渋々などではない。ここまできたらやれるところまでやってみたかった。

「遊びなら好きにしてよ。でも、心から本気になっちゃダメよ？ 恋なんて、物好きのやることだわ。」

感情を交えない、かなり冷静な発言が目立つ。客観的で、おそらくは物語中で一番オブザーバー的な役割。

「身の程を知って、いい人に惚れてもらったと感謝しなくちゃ。売れるときに売らないと、他のどこで売れるとも限らないでしょ？」

出来事を全部俯瞰で、一步引いたところで見ている感じ。それは私にもいくら心当たりはあったから、まったく理解できない感覚ではない。

「眺めてばかりいて自分は何も持てない、なんて。いくら経験しても、それはあなたを悲しませるだけよ。」

今のは自分自身にむけられた言葉。それでも後半「姉の恋人、に心が惹かれていく様子が示唆さ

れていく。

この子は姉に嫉妬しているのだろうか。それとも純粋な妹に憧れているのだろうか。はっきりと書かれてはいないし自分に兄弟姉妹はいないから、それこそ本当にもう想像するしかない。年齢設定は決められていないけど、ひとまず私と同じくらいだと想定する。どちらにしろ若い女性であることに違いはない、けどこの達観的な態度。古風な言い回しは彼女だけの特徴ではなく脚本全体の趣向だけれど、彼女に台詞を任されていることの意味をもっと重く受け止めたい。

——それは憤りの裏返し。何にもなれない自分、理想を描けず、かといって現実には満足しきれない葛藤と苛立ち。単純な喜劇のはずが、気がつけばいつの間にか人間心理にここまでかっくくらい深く踏み込んでいる。エンディングではもちろん、姉とその彼がめでたく結ばれる——。そこで不意に、目で追っていた文字の上を音もなく雫が濡らした。

「——っすいません、ちょっと休憩させてください」

とっさに片目を押さえて、本から顔を上げる。

「構いませんよ。というかもう時間も時間ですし、そろそろ切り上げましょうか」

柔らかい声で言って、彼が本を閉じる。つられて時計を見ると、時間は予想をはるかに裏切っていた。何故だか、どうしようもなく悔しい。そこで生まれる、自分自身にもよく分からない空白。その焦燥のわけに辿り着くこともできず。

「あの……大変申し訳ないんですけど」

彼が痺れた足を慣らすように、ゆっくりと立ち上がる。

「またシャワーお借りしてもいいですか？」

「あ……はい、どうぞ」

時間も時間だ、銭湯だってそろそろ閉まるだろう。どこまでもマイペースな彼に、私は呆然と頷き返す。気のせいか、日に日に彼が持ってくる荷物は増えている。着替えもバスタオルも洗面用具まで。まあ、それが特にどうというわけでもないけど。

一人きりだとやることもなくて、また台本を広げた。なんだかんだで、その中のドラマに引き込まれている気はする。文字だけで綴られた一見薄い世界だけど、読み込めば読み込むほど、考えれば考えるほど味わいは限りなかった。

その間に、浴室から水の音が響く。蛇口を捻る音までが聞こえる、本当に静かな夜だった。そのうち軽い睡魔に襲われて、頼杖をついてうとうととしかけていたところでドアが開いて床を鳴らす軽い足音。はっと起き上がって振り返る。

荒っぽく濡れた髪をかき乱しながら、自然な動作で彼の手が冷蔵庫に伸びた。よく冷えた缶ビールを適当に二三本つかみ出している。それさえももう、見慣れた光景のように違和感はない。…  
…ここ誰の家だっけ、と疑問を浮かべたくはなるけれど。

「やっぱり、難しいって思います？」

私の前に座って、腕に抱え込んだ缶を机の上に置いていく。そのうち一つを開けながら、さり気ない調子で問いかけられた。少し、考える。彼が一体何のことを聞いてきているのかと。そしてそれにどう答えるべきかを。

「そうですね……難しい、けど」

偽るだけ無意味だ。どうせこの人は、すぐにその真偽を看破してしまう。

「たまには、こういうのも悪くないかな」

よかった、と彼が笑う。私もつられて表情を崩した。あっという間に一本が空いて、二本目、三本目までもすすいとお茶か水のように流し込まれていく。ある種の奇術めいた不思議な光景に、私は言葉もなかった。ただ、それでも悪い気はしない。

見ているだけというのも味気なかったし、ちょうど喉が渴いているのもあって残された最後の缶を手を取った。どうせあんなにあるんだ、一本くらい構わないだろう。

止められるよりも早く、開けて口を寄せる。持ち上げて、最初にくいと一気にあおった。見ると彼は動きを止めて、目を丸くして驚いている。そんなに予想外だったろうか？

「大丈夫です、こんなの、ちょっと苦いだけの水ですよ。……付き合いで飲んだこともあるし」指の腹で濡れた唇に触れて、かたどる。おいしいと思ったことは一度もないけど、飲めないほどじゃない。

気にせず飲み続けるけれど、その度に舌はじんわり痺れていく気がした。やっぱり、苦いものは苦い。彼のペースが並外れていることを身を持って理解する。半分ほど残したところで、一気にくらくらと視界がおぼつかなくなった。

時計の針は変わらず静かに時を刻んでいる。等間隔の音色はメトロノームのように均質で、かつ眠気を誘い込んだ。このまま眠ってしまいたい、と思う一方でそれでも可能な限り逆らってみたいとも思う。

「明日も、ちゃんと起きますから」

それは一体、誰に向かっての言葉だったのか。

「大丈夫、ですよ。あなたさえ、黙っていてくれたら」

やっとの思いで空にした缶を机の上に置き、ぴんと指で弾く。やけに空疎な音を立て、平面を転がっていく。見るとその向こうにはまるで顔色の変らない彼が、平常のままに微笑んでいる。

「言うはずないじゃないですか。僕はあなたの」

「あなたの、なあに？」

ほとんど無意識に聞き返していた。視線を交え合わせると、私の眼差しに初めて彼が困惑したかに映る。開きかけたその口を遮るかのように、声をかぶせた。

「マネージャー？ 本当に、それだけ？」

聞きたくはなかったけど、聞いてしまった以上はもう仕方がない。

「本当に、それだけでここまでやってくれるの？」

答えは別に聞きたくなかった。私がただ、言いたかっただけ。目の前に置かれた手の上に、自分の手を重ね合わせる。より強く熱を帯びていたのはどちらだったか。彼の腕がぴくりと震えるけれど、けして私を払いのけようとはしない。——ずるい人。

「千沙都さん、酔ってますね」

そしてこの期に及んで、彼はまだそんな戯れを言ってくれる。

「酔ってなんかないわ」

膝をついてその肩に寄りかかると、寄り添うように体重を預ける。彼が息を飲むのが聞こえた気がする。そのまま少しずつ身体を傾けていくけれど、わずかにも揺らぎはしなかった。

もう胸を痛めはしない沈黙の最中で、何度も繰り返した文句がすらりと口をついて出る。

「`ねえ、あたしを口説いてみてよ。今、すごくいい気分よ、」

劇中、電話で次女が長女の彼氏を騙すシーンがある。——そう。姉と自分とを勘違いしているのを知った上で、彼を翻弄してみせる。

「`もしあたしがあなたの、正真正銘本物の彼女だったら。あなたなんて言ってくれるの？、」話して——そして、聞かせて。そう、私だけなんて、不公平だから。あなただって——もっといろんな顔をしてみせて。もっと悩んで、戸惑って、困ってみせて。

今、そこにあるのは。今までの悠長な面立ちじゃなくて、ずっと拙くて、ずっと稚い今この瞬間

、私だけが見ることを許された特別な感情。この距離で見ると、その違いも変化も手に取るようにはっきり分かる。彼は頑なに私を見ようとはしなかった。頭に来るよりも先に、とにかく困らせてみたくなる。

——いやらしい首筋。そっと唇を近づけると、熱に触れたように頭を背ける。

「……かわいいひと」

ますます、犯してみたくなる。そのまま深く目を閉じる。今はその狂ったような興奮さえいとおしければ、足場をなくした背徳感さえ好ましい。時間が止まったかのような錯覚。何もかもが捨て置かれた暗がり、恐怖は微塵も生まれなかった。そのままそっと身を任せる。

ただ、欲しかった。特別な一言か、特別な愛情表現を。`誰にでも等しい優しさ、なんていないから。

その昔、私がまだ本当に一人で何も出来なかった頃を思い出す。独りにされると不安で、家の中でひとり寂しくて泣きじゃくっていた頃。物音一つ途絶えてしんと静まり返った夜。そんな折々に、誰かを強く求めて泣いたのを。`、——幻聴が、聞こえた気がした。

彼の手が、私の首を撫でるように両方の肩に乗せられる。そしてそれは、私を——そっと自分のほうから、突き放した。

「なんで……どうして？」

目を開ける。視界が眩しい。最初私にはその意味も、理由も、状況も何もかもが理解できない。拒否された、拒絶された——それが分かった頃には、頭に血が昇って顔が真っ赤になってる。

「ごめんなさい。僕では、代わりにはなれません」

彼がゆっくりと首を横に振る。それが、あなたの答えだというのか。そんな風に、謝ってほしくなんてなかった。違う、どうして。だから、私が欲しいのは、そうじゃなくて。控え目な笑い方をして、彼の手私の身体はいとも簡単に引き離される。

「寒いですから、今夜もあったかくして寝てください」

そんなこと言われても——そんなこと言われたって、私にどうしろと。必要以上に、優しいコトバ。私が聞きたいのは、そんなものじゃない。

部屋を出て行く彼を、とめる言葉を私は持たない。それこそ置き去りにされた幼児のように、漠然とした不安と恐怖が全身を襲う。自分の中の、自分で説明できない感情。突き抜けた実体のない痛みが、胸のどこかを締め上げていた。

身体を折って、絨毯に顔を押し付けるようにして声を張り上げる。頬を伝う、冷えた感覚。忘れてた、こんなの、久しぶり、自分がわからなくなるほどの強い衝動。声を上げて泣く、泣き崩れる。こんなに寒い夜は、子供の頃以来だ——。

寒くて、凍えそうで、それでも不自由な手を一心に握り締めることしかできない。

時間、なんていうものはなんて残酷なんだろう。それでも変わらず朝はやってくる。学校は休むことにした。元々、授業は出来るだけ真面目に受けているから担任も電話一本で用事を済ませてくれる。あるいは、最初から私みたいな生徒に興味はないのか。実際喉は嚙れていたし、自分でも迫真の演技だったとは思うけど。

身体中が氷のように冷えている中で、目元だけが劣悪な微熱を残している。閉じても開けても、見える景色に変わりはない。頭まで毛布をかぶって、再度うつろなままに睡眠と覚醒とを繰り返す。

昼あたりまで寝過ごしていると、気がつけばまたその夢を見ていた。そして同じところで中断する。

「——ちいちゃん」「わたし、おおきくなったら」「そうしたらいっしょに」  
.....一緒に、なんだろう。どうでもいい、と何度も言い聞かせるのに、意思に反して心はそのわけを知りたがった。あたかもそれは、遠い昔に反故にした約束が今になって胸を焼くように。もちろん心当たりなんて、ない。

顔に張り付いた髪を払いのけながら、上半身だけを起こして考える。どうせ見るなら、もっと怖い夢がよかった。そうすれば目が覚めたときに失望じゃなくて安心できるのに。怖くて、泣けて、それでいて身体が戦慄するような悪い夢。残念だけど、そこまでには至らない。

どんなに突き詰めても、何の変哲もない嫌になるくらい静かな風景だった。そこに足りないものなんて、何も——何一つ。不足を感じるほうが本来おかしいのだ。

だけど身体は重くて、起きたはいいものの何もやる気は起きなかった。ベッドの上に膝を抱えて顎を乗せる。かじかんだ指が、触れる折から熱を奪った。

気詰まりなほどの静寂に、不意にインターホンが割り込んだ。顔を上げるが、所詮それだけ。当然のように無視をしていると、ドアを開ける音がして中に人が入ってきた。気のせいかな、近づいてくるのは鈍重な足音。それに、私が何かを思うより早く。

「なんだ、いたのか——千沙都」

扉の向こうに姿を見せたのは、二番目か三番目に最悪な相手だった。即座に身体が緊張を強いられる。

「社長.....」

いたのか、と言いながら驚いた様子も見えないのが不可解で怖気を誘った。乱れた寝巻きを慌てて直す。

「喜びなさい千沙都。高値で買ってくれるところが見つかった」

そんな私に構う風もなく、それは悠々と歩み寄ってきて私の座るベッドの端に腰かける。

「ビデオに三本出演して一千万。悪くない話だろう」

それは一体、誰にとって悪くない、のか。私は黙って唇を引き結ぶ。.....おかしなものだ。それはいずれ覚悟していたはずの事態なのに。笑ってしまいたくなるくらい、がくがくと全身が震えていた。

その手が私の腕を掴んで持ち上げる。誰かを呼ぼうとして、だけど一体誰を呼べばいいのか分からない。

「断れないよな、君は——」

強引に、自分のほうへと引き寄せる。そのまま、押し掛かるように押し倒された。重みに任せて、背中からベッドに沈み込む。泣きたいくらいに、どうしようもなかった。

逆らうように瞳を閉じると、そこに一瞬彼の姿がよぎる。その、よりもよって普段の顔ではなく、無理をしたような悲しみを隠す寂しげな微笑みが。

「やっ、やめて……やめて——っ！！」

叫んでその手を振り払い、気がつけば必死になって突き飛ばしていた。鈍い音がしたかと思えば壁にぶつかって、その身体が人形のようにくずおれている。

荒い呼吸を整えながらおそるおそる私は身体を起こすけれど、向こうが起き上がる様子はなかった。——気を、失っているのか。それとも、

心臓が落ち着いていくにつれ、別の角度で不安が募る。——それが目を覚ますよりも早く。急いで服を着替えると、咄嗟にいつも持っている鞆だけを手にとってその場から逃げ出した。行くあてなんて、当然あるわけもなく。

一時間ほど、行く先もなく電車で揺られた。特に明確な理由があったわけではなく、ただ単に人ごみに紛れてしまいたかったのかもしれない。それにも疲れてきた頃、一度適当な駅で下車してホームのベンチに座り込んだ。

昼下がりの街の風景。止まっては吐き出されて、詰め込まれて、また過ぎ去っていく。それぞれの目的地へと急ぐ群衆は、私の存在なんてまるで見えてないかのようだった。それはそれで好都合なようで、痛ましくもある。

驟り始めた太陽に気分も沈んでいたその時、鞆が振動していることに気づいた。携帯が着信を告げている——閑さんからだった。一瞬だけ迷ってから、すぐるように電話に出る。

「千沙都さん、今どちらに？」

いつもと変わらない、耳に優しくよく馴染む声だった。それが一旦沈んだかと思うと、調子を抑えて伝えてくる。

「学校をお休みしたと聞いたものですから。家に行っても姿が見えないですし」

私は何も答えなかった。その合間は、私よりも彼のほうを焦らせたらしい。

「すみません……あの、昨日は」

「謝らないで、ください」

ぴしゃりと告げて言葉を断ち切る。ああまったく、この人ときたら。私が怒っている、とでも思っているのだろうか。嫌になるくらい正直なんだから、と無意味に腹立たしくなってくる。

そんなこっちの心を知ってか知らずか、次に彼はこんなことを言った。

「お会いできませんか？家で待っているの」

「待ってください、それは」

すぐに異論を挟む。家はまずい、帰りたくない。

「どこか別の場所で……どこでも、いいから」

向こうが黙り込む、どうやら考え込んでいるらしい。

「それでは、アーデンホテルのロビーはいかがです？今、僕がその近くにいるので」

聞いたこともない名前だ、と思ったが私が対策を講じるよりも早く。

「タクシーを捕まえてきてください。それが一番早いと思いますし」

「……分かりました。それではまたあとで」

電話を切って、そこで私は愕然とした。家に行っても？さっき、確かにそう言わなかったらうか？それは一体、どういう意味だろう？

……分からない。何故彼が、そんなことを言ったのか。携帯を握り締めて、覚悟も決める。どのみち逃げ切れるわけもないし、何より今とても会いたかった。閑さんに会って、慰めて欲しかった。叱ってもほしいし、優しく笑っても欲しい。我ながら贅沢な注文だ、と思う。

少しでも時間が惜しくて、大通りに向けて駆け出す。空車はすぐに捕まった。幸い制服ではなか

ったから、運転手に怪しまれることもない。適当な受け答えをして、仕事帰りの事務員を装った。

「——それでは次のニュースです」

信号待ちの交差点で、運転席のウィンカーの音にかぶさってラジオの音声が告げた。

「今日午後西区のマンションで男性が死亡されているのが発見されました。警察は身元の照会を急いで、この部屋の住人との関連を——」

膝に抱えていた鞆が、足元に転がり落ちる。急いで手に取るが、動揺は隠しきれていない。そんなに早くニュースになってしまうなんて思わなかった。

「お客さん、どうかされました？ 顔色、悪いですよ」

「いえ……大丈夫です、何でもありません」

バックミラー越しに運転手が声をかけてくるのを、私は作り笑顔で何とかかわす。疑われる、わけにはいかなかった。

指定された場所はそんなに大きくない、せいぜいビジネスホテルとかそういった類の建物に見えた。駅には近いけれど、繁華街からは少し距離がある。雑居ビルに囲まれて路地もわりと入り組んだ、印象としては寄り付きがたいもの。財布に必要なだけのお金が入っていたのも幸運だった。手短かに礼を言い、足早に車を降りて離れる。

車が走り去ったその後——そこに私は見つけてしまった。すぐ通りを挟んだ斜向かいに、五十メートルと離れていない場所に、警察署がある。ただの偶然だと思っていたかった。だけど、交番でも派出所でもなく。位置関係も巧妙だ、こちらからはともかく、向こうからはホテルに出入りする人間を監視することもできるだろう。それに待ち合わせ場所を決めたのは彼。偶然と判断するには、あまりに出来すぎている気がした。

……このまま会ってもいいものか、内側から湧き起こる衝動に、足元がぐらつく。会いたい、という思いと葛藤するけれど。優に五分は悩んで、私はそこから踵を返す。それが結論だった。

それでも行きたい場所があるわけでもないから、せいぜい辺りを彷徨うくらいが関の山。周囲に人影は多くはないけれど、外が暗くなるにつれ否が応でも孤独を煽られる。

やっぱり、今からでも。だけど、あの人は。一体、私をどうするだろう？ 邪険に扱うはずがない、と思う一方で。どうしてそう言い切れる、といつになく穿った見方をする自分。

どうして、そう言い切れる？ あの人は、私を拒んだ。そこまで強い拒絶ではなかったけれど、選んでくれなかったことは私としてはほとんど自分自身を否定されたも同然で。

それでも、矛盾していると分かっているにも関わらず今この瞬間も会いたいと考えてしまう。何もかもが、堂々巡りに近かった。何もかもが本格的に嫌になって、軽い目眩とともに物陰で足を止めた——その時だった。

建物の陰からいきなり手が現われて、そのまま暗がりには引きずりこまれる。ほとんど一瞬だった。抗いようもないほどに強い力、その——おそらくは男性だろう、人物は私の右手を両手で掴むようにして今は使われていないらしい廃屋に連れ込んでいく。奥行きが見えないほどの暗闇で、隣のビルの明かりだけが光源だった。

あまりに突然のことで、悲鳴どころか声一つ出せない。もっとも、騒いだところで外の喧騒に勝てるか自信はなかったけれど。するとその人物は静かに、とジェスチャーで示すと顔を隠すほど深く被っていた帽子を脱いでみせた。そこに現われた表情は。

「柏原……さん？」

信じられない。けれど、間違いのないのも本当だった。その相反するどちらもの情報が、頭の中で凌ぎを削ってる。何度も何度も目を閉じて、両手で擦って、その上で再度確かめる。



顔は見慣れた、つい先日まで私の仕事を世話してくれていた柏原隆正、という人物のもの。見間違えるはずなどない。ただ今は、記憶にあるものとはまた違う粗野な眼差しをしている。

「もう、君が逃げる必要はない」

唐突な一言だった。それは一体、どういう意味なのか、何のことを言っているのか。理解できずに、私はただ呆然と立ち尽くすだけ。

「俺だよ。といっても分からないかな」

軽く口元を歪めて、自嘲的な笑み。口調には諦めにも似た感情が感じ取れた。その謎めいた態度に、私が困惑して何も言えずにいると。

「なあ——ちいちゃん」

一瞬で心臓が動悸して、私は予期せず一步後ずさった。かすれて今にも消え入りそうな、その声はどこか救いを求めるようにさえ思われる。それは酷く懐かしい響き。なのに何故か、今はまるで性質の悪い夢に苛まれているかのよう。

「まさか……そんな、どうして……っ」

嘘だ、そんなの嘘に決まってる。何故あなたがその名前を知っているのか——？もちろん、彼が私をそんな名前と呼ぶのは初めてのはずだった。少なくとも、覚えている限り。

頭が完全に混乱している。どれが真実で、どれが誤解なんだろう。数メートルの距離を、彼が一步一步私に向かって近づいてこようとする。

私は動けなかった。縛りつけられたかのように、逃げようとする考えも、背を向けようという意識も実行するには至らない。……逃げる？一体何から？

どうやら私は、目的自体を失っているみたいだった。

「——千沙都さん！！」

硬直したその場を再開させたのは、割り込んできた力強い声だった。弾かれたように後ろを振り向くと、走ってきたのか、そこには肩で荒々しく息をする彼の姿がある。

「千沙都さん、この人は」

私を視界に認めた閑さんが、その先を躊躇った。おそらく何かを言おうとして、言えずに言葉を閉じこめる。そしてその代わりに、私を挟んでその向こうに立つ彼に口調を変えてたきつける。

「今のあなたを、彼女に近づけるわけにはいかない」

それもまた、何の見間違いだろうかと思う。あの閑さんが、普段とは似ても似つかない剣呑な眼差しを作っている。睨みつけるほど鋭く、向けられているのは今私が見ている側に対してはるか後方。

背を向けていても柏原さんのほうにも緊張が走るのが分かった。事情は悟れなくても、二人の間に走るただならぬ空気だけは読み取れる。

「たとえそれが、どんな理由であったとしても」

閑さんが目を伏せる。言い含めるように、単語のひとつひとつを丁寧にすくい上げて投げかけていった。

「あなたのしたことは、許されないことです——柏原さん」

そこで私は後ろを向き、彼のほうを見た。

「いえ、それとも本名でお呼びするべきでしょうか？——中沢隆正さん、と」

その間を決定的に分け隔てるよう、閑さんが私の前に立ちはだかる。

「なんでもお見通し、ってわけか？」

柏原さん——と呼ばれている彼が笑う。その喉を小さくくつつくと愉快げに鳴らして。今はもう

背中に隠れて半分しか見えない人影が自身の笑い声に合わせて揺れ動いているようだった。なかざわ、たかまさ。そのフルネームを声に乗せて反芻しているうちに、いくつかの断片的な記憶が蘇ってくる。

……知ってる。私はその名前を、記憶に残している。何度も聞いたことがあるし、自分で呼んだことだってある。遠い昔に、もう戻れない過去のある昔日の中で。

「——っまさ、ちゃん」

理解が追いつくよりも早く、くぐもった声が口から途切れがちにその名を呼んだ。

それはまだ、私が学校にもいけない頃の話だ。私と一緒にいてくれた。いつも一緒に遊んでくれた近所の幼馴染み。ちょっと年上のお兄ちゃん。……あるいは初めて心を奪われた相手か。

「なんで、どうして」

その記憶が信用できなかったわけじゃない。むしろ、記憶と現在とが合致したからこそ確かな疑問が湧き上がる。

何故、その彼が私のマネージャーなんてやっていたのか。先週突然姿を消して、今現われてみせたのか。そしてなにより、閑さんの言っていた言葉の意味は——。

私のそのかすかな呟きに、答えたのは閑さんのほうだった。こちらへ向き直ると、身体を半身にしてわたしと `柏原さん、と両方と相対するかの格好をつくる。

「申し訳ありません、——あの、どこからお話ししたのか」

突然しどろもどろになったかと思うと、その顔が急に曇って頭をうな垂れた。

「そもそも僕、事務所の人間なんかじゃないんですよ。ちょっと理由あって、あなたのマネージャーのフリをさせていただきましたが」

場違いなほどに、深々と礼儀正しく頭を下げる。代行業務って言ってもいいのかもしれないけど、と彼が弱々しい声で呟く。

「すみません——大変ご迷惑をおかけしたことと思いますが」

不思議と、そんなには驚けなかった。驚けない自分自身に対して驚いてしまうくらいに。ただそれはやはり、それまで何度か彼の素性に懐疑を抱いていたからなのかもしれない。

「どうして、こんなことを？」

意外なほどに、自分の頭の中は平静に返っている。ひとまず状況を認めて、その上で解決しきれない疑問を呈するだけの余裕はあるらしかった。今までよりも、より長い沈黙。その間に表情が、一段と陰しさを増した気がした。

「……先週、この近くで雑誌記者の男性が変死体で見つかった事故、覚えてますか？」

やがて話題に上ったのは、まるで関連も見られない世間話にしか思えない。それが一体、どうかしたと言うのだろうか？訝りながらも、短く頷き返す。

「警察の捜査では、それは事故ではなく他殺の可能性が強いとの話でした。それと同時に、彼が亡くなる直前にある取材をしていたことも分かっています」

ある取材？と聞き返して、私は首を軽く傾げる。

「遺留品から……残されたデータやメモなどから、どうやら彼はあなたの身边を調べていたようなんです」

あなたの。その四文字が、耳に入ってきてても容易には理解できない。そんな、ことってありえるんだろうか？

心なしか、動揺したかのように `柏原さん、が靴底を鳴らす。閑さんはそれを一瞥しただけで、特には気にも留めずに先を続けた。

「もう少し詳細に述べますと、あなたのご家族だとか、出身、ここに至るまでの経緯を。取材内

容は事務所の実態そのものにも及んでいたようなのですが」

それが何を意味するのか。ピンと来なくて今もって分からない私に、彼はわずかに口の端を引き上げてみせた。

「もしそんな記事が、現実に雑誌に載せられていたとすれば？」

謎かけをするかの言動は、戯れからではなく言いにくい部分を避けているからに思える。

「駆け出しの若手アイドルの実情、なんて——そんなネタが本気で売れたかどうかは計りかねますが。重要なのは、それが本人にとってどうやら不利に働く可能性を伴っていた、というそのことです」

そこまで来て私の方もようやく理解が追いついた。例えば、仕事を追われたり。もっと言うなれば社会的に追い込まれたのかもしれない。もっともそこまでいなくても、私にとっては事務所を厄介払いされること自体が端的に生きていけなくなることを意味している。

「もし関係者が事前にその情報を察知していたとすれば、流出する前に意地でも止めなければ、と考えたでしょうね。この手のスキャンダルは事実か虚偽かはこの際問題じゃない、妙な噂が立ってしまった、というだけで痛手に繋がるかもしれない。いえ、むしろ——」

閑さんはその先を言いかけようとして、取りやめた。しまった、とでも言うような様子で。けれど私には分かってしまった。むしろ、本当だったら——本当だったからこそ。尚更、公表されても言い逃れなど出来ないのだ。

私自身、自分の過去を他人に知られたところですぐさま致命的な不都合を起こす、というものではないけれど。問題は私自身がどう思うか、以上に周囲の人間がそれをどう見るか、だろう。けして愉快的事態だとは到底考えられない。

私の懊悩を知ってか知らずか、閑さんが声の調子を落とす。視線も下方を泳いでいた。ぐっと目を細めて、その横顔に影を落とす。

「有力な容疑者として挙げられたのは、当人の周りか、事務所の人間か——あるいは」

それが私に気を遣っているためだと気づいたのは、やはり今度もそこで不自然に台詞が途切れたから。

「じゃあ、私のことも疑っていたんですか？」

答えは考えるまでもなく予測できていたはずなのに、どうして聞いてしまったんだろう。責める意図は一切なかったけれど、結果的に詰問するような形になってしまう。彼は私に視線を向けると、完全に弱りきった気配で一度首を縦に振った。

「すみません。言い訳がましいとは思いますが、あの状況では誰を疑ってもおかしくなかったんです」

それに対して私が思ったのは許せない、でも憎たらしい、でもなくただ信じられない、というそれだけだった。/信じられない。あの笑顔の裏で、あの打ち解けた態度の奥でまさかそんなことを考えていたなんて。

「それが、僕がここに潜入した理由の一つ」

一つ？ その言い方が気になって、私は静かに眉を寄せる。それはどういう意味だろう？

「他にもあの事務所に関して、内部調査の依頼が来ていましたから。以前からよくない噂が絶えていなかったそうで……その真偽を確かめ、事実ならば証拠を掴むこと、と」

事務所に関する悪い噂——やっぱり、女の子を売ってた、っていうそのことだろうか。

遅すぎる、と誰にともなく不条理な怒りを覚えた。どうせなら、もっとずっと早くに何とかならなかったのか、とってしまう。完全に自分を棚に上げた無責任な感情だけれど。

それからまたしばらく間を置いて、不意に閑さんが顔を笑わせた。演技などではない、と思う。

それは居間で一緒に映画を見ていたときの表情を思わせる。一転して緩んだ柔らかい口ぶりで、言葉もそれと同様緊張を解いて和んでいる。

「そして最後に、あなたを探すこと、です」

またも意味が分からず、私は顔をしかめさせた。気分はほとんど置いてきぼりにされたかのようだ。

「ご存じないとは思いますが、検索願が出されているんですよ」

誰が？……私が？ それこそまさに寝耳に水、だった。思わず聞き返してしまうと、彼は間違いありません、とさらに言い添える。

「嘘、そんな……だって」

一体、誰が？ 誰がそんなことを——そんなの、誰もいないはずだ。私にはそんな、捜してくれる人も行方を案じてくれる人だって。現にこの一年間、私は仕事と学校以外では誰にも会わないような生活をしてきた。

「まあ、結果としては警察よりも本人が捜し当てるほうが早かったようですけどね」

そこでまた、閑さんの顔が`彼、に向けられる。同時に表情もこちらからは見えなくなった。

「中沢さん、あなたは小学生の時に遠方の地元からこの辺りへ引っ越されていますね」

その一言を聞いて、私もおぼろげながら昔の記憶を振り返る。そう……確かにそれ以降、彼の姿はぷつぷつと現われては来ない。文字通り消えていなくなったのだ。過去の自分の実体験の中から。

「何の因果か偶然か、幼馴染みだった少女が事務所に連れて来られているのを知ったあなたはいてもたってもいられなくなって、「柏原」と姓を変えて側に近寄った」

遠すぎて、あるいは暗すぎて向こう側の彼の顔色も分からない。黙り込んでいるのは、どういう考えの下でなんだろう。構わず閑さんは先を継ぐけれど。

「あなたとしてはもちろん、すべてはその少女を守る意図での行動だったのでしょうか」

それがまた、私には飲み込みきれなかった。守る？ 誰を——私を？ 誰が——`柏原さん、が？ 何かが引っかかって、胸の中がもやもやとざわめいている。

「僕は、あなたの犯した罪を暴かないわけにはいきません」

それはまるで遠まわしに抵抗しないでください、と言っているように聞こえた。それを証明するかのように、閑さんは私に後ろへ退がるよう手を伸ばし、反対に自分は前方ににじり寄って相手との距離を詰める。

「本心としては、このまま自ら警察に足を運んでいただけないものかと思います」

言葉つきはどこまでも丁寧だけれど、そのうちに潜む真意はけして穏やかなものではないと私でも感じ取れた。二人はそれきり、そこから一步も動かない。動く気配もなかった。

「俺は千里を守りたかった。その気持ちに嘘偽りはない」

返って来たのは、ただそれだけ。追従する弱さもなければ、跳ねのける強さも持たない。ただ本当に、胸中をそのまま声に乗せただけのような率直さ。

一方ならず、驚かされた。動揺が身体中を波打つように広がる。初めてだったから。`柏原さん、が私を名前で呼ぶのも、呼び捨てにされたのも。

「だから、この結果には満足している」

「そんなもの、あなたの欺瞞だ」

即座に撥ねつけた閑さんの声は、低く滞っている。こちら私を呆然とするほど困惑させた。初めて耳にする、日常とは対照的な静かに抑えた調子で、その手を硬く握り締めている。

——だからなんで彼は、いつも他人のあり方にこんなにも過敏に反応するんだろう。

「どんな方法にだって最良はないかもしれない。けれど、最悪を回避することくらいはできたはずでしょう？」

それは明らかに、責め立てるための順序だてだった。なのに、問いたてるほうが必死になって食いかかっている。

「あなたが、本当に彼女を思うのなら——もっと別の方法だって」

私に窺える限りの印象では、浮かび上がる言葉は悔しそう、だった。彼は責めている、目の前のその人を。けれどそれはもしかしたら、自分自身をも。

そこで不意に、握っていた手から力が抜けていく。

「……すみません。やはり僕などが口を挟むべき問題ではありませんでした」

問答の無意味さと、むなしさとにたどり着いて閑さんは静かに息を吐く。二人が何を言っていたのかはよく見えないが、これだけはひとつ分かる。それはつまり、もう起きてしまったことに対しては議論するだけ無益だ、ということなのだろう。

必然的に、一方が勢いを失くせば他方が強気になるのは予想できた展開だった。

「手段なんて、選んでいられなかったさ。あの記者は、千里のスキャンダルをネタに社長を脅していたし、その社長は千里を金で売ろうとした」

聞きたくない、と思った。とっさに両方の耳を手で押さえて、目を伏せる。だけど閉じた指の間からも彼の声は入り込んでくる。

「止めるためには、仕方なかったらう？」

最後、その一言は私には問いを差し向けているかのように聞こえた。それと似た種類の眼差しも同時に感じる。私には口を挟むことなどできはしなかったけれど。すべてが黙り込むと、時間は緩やかに停滞した。訳もなく泣きたいような衝動に駆られる。

「……残念です」

冗長な間を置いて、短くそれとだけ閑さんが声を漏らす。ほとんど感情を交えない、抑えつけて沈み込んだ呟き。でもそれが、だからこそ反対に彼の本心を示しているのだと私には思えてならなかった。

それがどういう意味なのか、悟り切る前に続いてすみません、と繋がっているようで繋がっていない台詞が継がれる。——それは結局、誰に対してだったのだろう。

閑さんは二歩で対象との距離を詰めると、洗練された無駄のない動作で彼の上着に掴みかかった。そのまま片足を崩して、背中から床に叩きつける。投げ落とす、とでも言ったほうがより正確だったかもしれない。

苦しそうな呻き声上がるが、それでも身体を押さえながらも「柏原さん、は起き上がった。ジャケットのボタンがはじけてはだけている、威力も半減したのだろうか。」

上着を脱ぎ捨てる「柏原さん、——するとそのポケットから折りたたみ式のナイフが取り出された。刃先は見るからに鋭かったけれど、色は黒々と不気味に鈍っていて届くはずの光も返さない。そんな光景を私はいまだかつて見たことなどなかった。

それに閑さんは怯む様子など微塵も見せなかったが、一瞬だけ視線をこちらへ戻して私の位置を確認する。ほとんど反射的に柱の影に身を潜めた。どちらをもとめる声を、私は持たない。

五秒か十秒か——どちらにしる私の体感した時間は随分長かったように思う。手に持ったナイフを、彼は予期せず自分の喉元へと押しあてた。浅く皮膚が切れて、血が一筋流れ落ちる。

「すまない、千里」

その中で、不意に紡ぎ出された声は信じがたいほど穏やかなものだった。即座に閑さんが彼の手から刃物を奪い取る。凶器は床を弾いて、空々しい音を立てて滑っていった。

その上で彼の右手を捻り上げると、空いた側の肘で後頭部を殴りつけ、昏倒させる。うつ伏せに倒れた身体は、それ以上動くことも何かを言うこともなかった。

終わった、と思い至るのとほぼ同時に膝から力が抜けてその場に崩れ落ちる。なのに、心を落ち着かせるどころか得体の知れない不安が胸を妬いていた。

なんで。私に謝る必要があるっていうんだらう。パニックになった頭で必死にその声を繰り返して思い浮かべる。もちろん、聞き覚えはあるのだけれど——そうじゃなくて、それはもっというと昔のことを暗示している気がした。ここ一年より、もっと遠く引き離れた記憶。

今はもう、思い出の中にだけ存在する……残酷なまでに平穏な風景。私と誰かが、笑い合ってる。誰かが私と、泣いてくれている。その誰か、そんなものは一人しかいないと私は知っていた。それが脳裏に蘇ったとき、熱い滴が頬を伝って落ちる。

ああ、どうして思い出せなかったんだらう。——いっしょに。一緒に、暮らそう、って。そうだ、確かそう言っていたんだ。あの時、私はそう言って——向こうもそう言ってくれて。他愛のない幼少期の、他愛もない約束事。私にはそんなこと、とうに意味を失いかけていたっていうのに。

視界があふれる。零れて、周りが見えなくなった。そこでかすかに電話のコール音が響く。閑さんが携帯で、どこかにかけているらしかった。反射的に立ち上がると、駆け寄って夢中になってその袖にすがりつく。

「違うんです、閑さん。全部私が悪いんです——だから」

対して閑さんは、冷淡にも思えるほどに落ち着いた素振でそれに返した。

「社長の死因は刃物による失血死です。おそらく千沙都さんが部屋を出て行った後、この人が止めを刺したのでしょう」

彼が床に落ちたナイフに目を落とす。そこでやっと気がついたけれど、全体が黒く見えたのはべつとりと満遍なく付着した血痕のせいだった。

それを見ても、不思議と何も思わない。涙を拭くと、正面からきっちりと顔を見せて不器用な笑みを浮かべた。

「違います。この人は、私のために罪を犯したんでしょう？」

手を伸ばして、床に落ちたナイフを拾う。その切っ先を、怪我しない程度に指でなぞった。

「だったら、私が罪を犯したのと変わらないと思う」

「違いますよ、あなたは何も悪くない」

今まで冷静だった彼が、途端に慌てるのが分かった。それを明らかにするよう、口調が焦って早口になる。

「誰が悪くて誰が悪くないとか、そんなもの一概に言い切れないけど僕は言い切ります。千沙都さんが心を病むことなんて、何一つないんだ——絶対に」

熱のこもった声。その言葉は嬉しい反面、酷く私を迷わせる。何でこの人はそこまでして私を擁護してくれるのか、と。

何も考えられない私の肩に、彼が力強く手を乗せる。それに合わせて無意識に、足から力が抜けてしまった。視界が一気に低くなる。けれど手に持った柄はしっかりと握り込められたままで、刃先は不幸なことに下を向いていた。

何かが引っかかるような感触。ざらついた床に膝がついたと思ったその矢先に、手のひらから指先までをどろりと生温かい液体が濡らしていく。見えたその刃は今や黒ではなく、目覚ましいまでの深紅に染まっている。

開きかけた私の口からは、声すら出なかった。喉が張り付いて、恐怖に震えおののきながらその

顔を見上げる。無造作に裂けた衣服。手で押さえる合間からも、その脇腹からは血が流れ落ち続けている。それでもどういうわけなのか、彼は朗らかな笑みを絶やさなかった。

浅い呼吸を繰り返して、顔は見るからに青白くなって行って無理をしているのなんて明白なのに。明るい笑い声を装って、何も言えない私に向かってわざと微笑んでなんか見せる。

「だいじょうぶ、です——あなたは、なにも」

胸のうちには正体不明の憤りが生まれて、勢いを増していく。この人、本当にバカだ。私のことなんか、放っておけばいいのに。放っておいて、構いやしないのに。——いっそ、放っておいてくれたのなら。

耐え切れず零れた涙が、床に広がった血溜りにわずかに波紋を作っては消える。その上に、彼の身体がゆっくりと崩れ落ちていった。その瞬間だけ、スローモーションのように脳裏に焼きつくような映像。

「閑さん！？ 閑さん——しっかりしてください」

それでも彼は、最後まで結局笑っていたんじゃないか、と私には思えてならなかったのだ。

それからの顛末を語るのは、あまりにも無意味なことだと思う。それは結局、誰もが予想しうる範囲内の出来事だろうから。

五分とかからず到着した警察が、後の処理を全部迅速に行ってくれた。私も署まで同行して、事情聴取にありのままを偽りなく証言する。それが彼と、彼のためになると信じて。

家に帰ってからは二日間どこへも出かけず部屋に閉じこもっていたけれど、三日目にはようやく半端ながら気持ちの整理がついた。久しぶりに傾きかけた懐かしい日光の下に出る。警察署に送られた彼と、病院に送られた彼と。どちらを見舞おうか、と考えて。あの人は逃げないけど、その人は放っておいたらどこへともなく行ってしまいそうな気がしたから。実際、私の勤は当たっていたらしい。

受付に尋ねると彼はとっくに退院する手続きを済ませていた。あと数時間でも躊躇っていたなら会えなかったかもしれない。

慌てて紹介された病室を訪れると、本来個室であるはずのその場所には彼のほかにもう一人、誰かがいるらしかった。見知らぬその人は、彼とさも親しげに会話をしている。

わずかにできたドアの隙間から様子を窺うと、そこには年の頃は中年の、ノーネクタイのスーツ姿の男性。でも親にも家族にも、かといって親戚にも見えなかった。

「僕がもう少し動けていたなら……犠牲者は一人減らせていたかもしれない」

「あまり自分を責めたものじゃないよ。言っても、仕方ないだろう？」

どうやら二人は事件の話をしているらしい。

しばらく息を潜めて見ていたけれど、意味はなかったようだ。すぐに気づかれて、向こうからドアが開けられる。その人は私を見ると、軽く笑って挨拶をしてくる。顔のパーツや声、共通点はどこにもないのに、何故かそのとき私には閑さんと似た笑い方をする人だな、という印象が感じられた。

「じゃあ、自分はもう行くよ」

男性は壁にかけてあった上着を手にとって、私と入れ違いに部屋を出て行こうとする。

「すみません、本当何から何までお世話になりました」

それに対して、閑さんはぺこぺこ滑稽なほどにお辞儀を繰り返した。

「今に始まったことじゃないだろう？ 水臭いなあ、もう」

言って、その人は閑さんの肩を遠慮なくぼしぼしと叩く。彼が顔をしかめて短く呻いた気がした。

「じゃあ、また」

「はい、お疲れ様ですタカアキさん」

そして男性は私を最後に、もう一度見て笑いかけると軽快な足取りで去っていった。

部屋には、奇妙な沈黙と微妙な空気だけが取り残される。何から聞こうかと思って、でも何から何まで疑問だらけで結局何も言葉にはできないまま時間だけが過ぎる。

そこで気づいたけれど、彼はよくよく変わった服を着ていた。変わった、というほどのものでもないけれど……ここは病院なのだから予想されてしかるべきはパジャマやそれに類するものであったはずだろう。それがトレーナーにジーパンというカジュアルな選択。今からまさに街を歩いていけそうな軽装だ。

その上ベッドの端に腰を掛けて、スニーカーの紐を結んでいる。その脇にはやけに大きなリュックサックが置かれていて、私は漠然とその意味を考え始めていた。

それが終わると荷物を整理整頓し始める。気のせいかな顔はまだ若干青く見えるものの、一見したところその姿はいたって平常にしか映らない。



これはあとで聞いた話になるけれど、彼は結局その傷を「自分で転んだ」と言い張ったらしい。緊急手術を受けて、そのまま入院を余儀なくされたほどの重傷なのに、気に留めていたのはずっと「保険は利きますか」とか「労災おりのかなあ」……とかだったとか。

呆れるほど——本当、呆れてしまうくらい。

私は面会人用の椅子に腰を下ろす。位置としてはこちらに背を向けた彼の後ろ姿を見る格好になる。呼びかけるわけでもなく、誰にともなく話しかけてみた。

「私、柏原さんが住んでたマンションに移ることにしたんです」

彼の手が止まる。首を捻って、こちらを振り返ってくる。

柏原さん——改め、中沢さん、は、当面の家賃を払い込んだ上でマンションの管理人に「私を住ませてほしい」と話を通してあったらしい。あの人は自分がいなくなった後のことまでも一通り考えていたということ。

「オーディションはちゃんと受けに行きます。あなたのためにも、彼のためにも」

それどころか、仕事先のありとあらゆるつてを使って「私の面倒を頼む」と触れ回ってあったらしい。私はさっさとこんな仕事辞めてしまおうと思ったけれど、どうやらそういうわけにもいかなかった。というよりも、今のところ可能な限りは続けてみようか、という程度だけど。

「あの人のやったことは、間違ってたと思うけど」

でも、私にどうこういう資格はない。あの人の隠した思いに、正体に気づけなかった私には。今思うとこの一年間表面上の簡素なやりとりしかしてこなかったのも、私に気づかれまいとしたのかそれとも私が気づくのを待っていたのだろうか、と感じられた。

長い間彼は黙っていたけれど、最後にそうですか、と小さく呟くと重そうな荷物を軽々と担ぎ上げてその足を扉へと向ける。

「あなたなら、絶対に大丈夫ですよ」

根拠なんかない、けどそこまで確かに言い切られるとそう思えてくるから不思議だ。思わず立ち上がった私は、相好を崩した彼の表情に行き当たる。まなじりを下げて、緩んだその口が言うことには。

「最後に、何か一緒に食べましょうか」

——最後に。その一言に嬉しいような悲しいような、矛盾する感情がない交ぜになりながらも、私は大きく首を縦に振る。やっぱりそれは、嬉しかったからだと思う。

スーパーで適当に食材を買い込んで——彼は領収証を書いていたみたいだけど、一体どこに持って行くつもりなんだろう？——ともかく辿り着いた先は人気も絶え始めた公園だった。

私が自宅に帰りたくない、と駄々をこねたためだ。一度マンションに寄ることは寄ったのだけれど、荷物を取りに行っただけですぐに出てきてしまった。だってきつと、家で話し込んでしまうと時間が過ぎるのが怖くなる。

この時間だと日もほとんど暮れて、頼りになるのはおぼろげな外灯くらいのもの。ベンチに買って来た食材を並べて、水飲み場に併設された水道で野菜を洗い始める。

道具がない、と不審がっていると用意がいいことに彼の荷物からはなんとまな板と包丁が出てきた。呆気にとられながらも、私も準備を手伝うことにする。

まさか、と思ったところで次は鉄製の鍋もが取り出された。どう見ても一人用のものではない、持ち歩くには不適當な深鍋。構造を疑った。鞆の中と、彼の頭の中、両方の。

夜の冷気の中、継続した作業は指も手も凍らせていく。けれど赤くなった指に息を吹きかけたり、一旦消えた感覚が折り曲げるとに返ってくるのはどうにも懐かしい気分だった。例えば昔、外で遊んだりしたときのように。子どもに戻っていくかのようで、やっているうちにどんどん楽

しくなってくる。

下ごしらえが済むと、彼がマッチを擦って携帯型の小さなガスコンロに火をつける。それからだしをとった鍋をその上に乗せた。

「そういえばあの土鍋どうでしょう？」

暗がりに浮かび上がったか細いともし火に目を向けたまま、私は彼に尋ねる。

「あなたですよ？ 買っておいでくれたの。私に覚えはないから」

切り刻んだ野菜をだばだばと投げ込みながら、閑さんがわずかに苦笑いした。

「あー、差し上げますよ。僕にはちょっと荷物になりますしね」

確かに、と納得してしまう。これがあるなら要らないだろう。彼の荷物には、箸や食器まで常備されているらしい。もはや驚くのも疑うのもやめて、煮え立った鍋に関心を向けた。

夜の闇と寒空の下に立ち昇る柔らかい湯気。熱々の肉や野菜や豆腐を冷める前に次々と頬張っていく。出来はともかく、味は最高だった。ともかく、と言わざるを得ないのは中に私が切った不恰好で不揃いな食材も交ざってしまっているから。彼が手をかけたのと比較すると一目瞭然。それさえ今は、愉快的気分を煽るほどだけれど。

鍋をつつきながら、同時に彼は持ってきてあった缶ビールを空けていく。私は、といえど眠ってしまうのももったいなかったから一口だけ貰って、あとはずっとそれを眺めていた。

正直、どんな会話を交わしたかは覚えていない。ただ、こんなにも本気で笑ったのは久々で、滅多にない出来事だったってことは確か。心なしか今夜は口数が少ない彼は、私の言葉に静かに耳を傾けてくれていた。最後に、鍋の残りの湯を浸して作ったインスタントラーメンの味は忘れられない。

「始発に乗ります。そこでお別れですね」

火が消えると、寒さも一層厳しくなって私は身体を丸め込んだ。夜が明けるのにはもう少し。この季節、空が明るくなるまでにはまだ時間がある。それでも眠っていた街は少しずつ、緩慢ながら動きを再開させていた。

公園からいくらか歩いて、彼が乗るといふバス停に辿り着く。並んでベンチに二人で座ると、言葉は途絶える。開いた口から漏れるのは、白々しい吐息ばかり。

別れを惜しんだり、互いの健闘を祈りあったり。そんなお決まりの台詞はいらないと思ったから、代わりに覚えてたのラインを暗唱した。

「`誰が見ても、上手な芝居だったと思うでしょ？ ねえ、実に上手い演技をしたって誉めてみてよ、」

顔を見られたくなくて、私は立ち上がって数歩離れると彼に背を向ける。

「`芝居なんだよ——本当に、」

「`不幸なのは自分たちばかりじゃない。世界を見れば、もっと痛ましい光景だってある、」  
それに続いたのは朗々とした分かりやすいセンテンスだった。

「`人間世界はみな芝居、男と女、とりどりに。すべて役者にすぎぬのだ、」  
声の調子から、それが何らかの典拠をそらんじているのだと分かる。

「素敵な言葉ね」

振り返って、肩越しに私は彼を見た。

「そうですか。僕は、実はそんなにあまり好きじゃないかな」

顔を上げると、向こうは困ったように笑ってみせている。初めて、彼の本音が聞けた気がする。その素顔が見れた気がする。この際だから、と言いたい放題を言うてしまうことに決めた。今まで散々私を騙してくれたことへのお礼だ。

「あなたはクビよ、閑さん。どこへでも好きなところへ行ってちょうだい。私はもう、ひとりでも大丈夫なんだから」

「そうですね。やっぱり、千沙都さんみたいな方に僕は相応しくないかな」  
なのに向こうは変に真面目な様子で、そんなことを言い出した。

「閑さんの嘘つき。あなたなんて、大嫌いよ」

ますます、互いに浮かべた表情は深くなる。ここまできたら引き下がれない。

「あっはは、早いとこ忘れてください。実は僕、こういうの本当苦手だったんですよ」

彼も一層声を張り上げて笑うけれど、一体どこまでが本気なんだか分かりかねる有様だ。そう思っていると、

「でも、千沙都さんに会えてこの数日間は楽しかったです。本当ですよ」

優しい顔色のまま、そこだけ妙に落ち着いた口調だった。

答えに臆する私を助けるかのように、あるいは嘲笑うかのようにバスが来てしまう。腰を上げて、事もなげに荷物を肩に背負って彼は歩き出す。

「教えて、あなたは一体何者なの？」

「そうですね、何と言えればいいのやら——」

呼び止める意思はなかったけれど、彼は一旦足を止める。

「僕もあなたと同じですよ、千沙都さん。あなたがアイドルという偶像に自分の居場所を求めたように、僕もまた」

私を見下ろしていた顔は、そこで視線を空へと入れ替えた。つられるように見上げると、明け方の空にほのかに差す薄紅は今日の天気を予報しているかのよう。口先だけがわずかに上を向いていた。

「やっぱり今はこれが一番的確なのかな。旅人、っていう言葉が」

そんな、現実離れした。でも不思議と納得できてしまう。それは確かに、彼の行き方を明示してる。

お決まりの挨拶を重ねた上で、彼はやっぱり私に向かって頭を下げた。対して私はそれに向かって手を振って、まばらな車道にその影は徐々に薄れていく。音も同時に離れていって、それはまるでフェードアウトする画面のようだった。

吐く息は一瞬だけ目に見えるだけで輪郭もなく、跡形もなく消えてなくなる。寒くないはずなんてないけれど、寒くなんてなかった。凍てつくその空気さえも、私に確かな感覚を刻みつける。幻のように蘇っては消え、消えては蘇る記憶の欠片たち。伸ばしていた腕を胸の前に引き寄せて、再び視界に空を映した。

「……だいきらいよ、あなたなんて」

いってしまうと、すがすがしくて、さっぱりして、けれどほんの少しだけほろ苦くって。私は瞼を拭いて歩き出す。その切なくて淡いくらいの色に、震えた唇は次第にやわらいでいく。

新しい一日の始まりを、今何よりも貴重だと感じている自分がここにいる。

〈END〉